

# 矢部南遺跡発掘調査報告

— 第1・2次調査 —

2000

田原本町教育委員会

# 矢部南遺跡発掘調査報告

## — 第1・2次調査 —

2000

田原本町教育委員会

## 序

田原本町は、奈良盆地のほぼ中央部に位置し、古代から米づくりの中心地として栄えてきた豊かな地帶です。現在の田原本町は整備された水田が広がっていますが、これは弥生時代に始まった米づくりが、古代に施行された条里制によって整然とした水田となり、今日に受け継がれています。このような水田の下には、多くの私たちの歴史が眠っています。

矢部南遺跡は、弥生時代の大規模な環濠集落である多遺跡に隣接し、また近くには貴重な副葬品が出土した团栗山古墳があり、古代多氏の本貫地と目される地域に位置しています。この地域の解明は、未だ進展しているとは言えない状況です。この矢部南遺跡で平成11年度と平成12年度に小規模な調査を行い、多遺跡との関連を考える上で重要な成果が得られました。

今回、その成果を調査報告としてまとめました。ご高覧いただき、ご指導願えれば幸いに存じます。最後に、この調査にご協力いただきました関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

奈良県田原本町教育委員会

教育長 森 口 淳

## 例　　言

1. 本書は、奈良県磯城郡田原本町矢部に所在する矢部南遺跡の第1次・第2次発掘調査報告である。
2. 調査は、田原本町産業振興課が計画する土地改良事業に先立って実施したものである。工事は平成8・9年度の2年度に及んだため、調査も2年度に分けて実施した。平成8年度を第1次調査、平成9年度を第2次調査とする。

### 〔第1次調査〕

1996（平成8）年11月18日から11月25日まで（実働6日）。調査面積約525m<sup>2</sup>。

### 〔第2次調査〕

1997（平成9）年12月10日から12月24日まで（実働12日）。調査面積約425m<sup>2</sup>。

4. 発掘調査は、文化財保存課技師　豆谷和之が担当した。
5. 調査には、下記の発掘作業員、調査補助員が参加した。

### 〔第1次調査〕

発掘作業員：人材派遣会社㈱ヤマショウ 6名

調査補助員：八木健一郎・斎藤有美（当時奈良大学学生）

### 〔第2次調査〕

発掘作業員：木下博・谷昭男・森川長夫・吉川順博・山澤節子

人材派遣会社㈱ヤマショウ 4名

調査補助員：小栗典子・小林善也・深川義之（当時天理大学学生）

滝下達（当時奈良大学学生）

6. 出土した遺物の整理作業は、土器実測およびトレースを辻口菜穂子（当時奈良大学学生）、一部の土器実測を平岩里張（当時奈良女子大学学生）、石器実測およびトレースを清水元美が行った。
7. 発掘調査の遺構・遺物出土状況写真は豆谷が撮影し、遺物写真は佐藤右文氏が撮影した。
8. 調査および報告書作成にあたっては、有本雅己・佐藤良二（香芝市教育委員会）、橋本裕行（奈良県立橿原考古学研究所）、松本洋明（天理市教育委員会）の諸氏にご教示を賜った。記して感謝します。
9. 本書の執筆・編集は豆谷がおこなった。

## 本文目次

第1章 矢部南遺跡の位置と環境 .....	1
第1節 地理的環境 .....	1
第2節 歴史的環境 .....	2
第2章 矢部南遺跡第1次発掘調査の成果 .....	7
第1節 調査の契機とその至る経過 .....	7
第2節 調査の成果 .....	7
1. 調査の方法 .....	7
2. 発掘調査日誌抄 .....	7
3. 層序 .....	8
4. 遺構 .....	9
5. 遺物 .....	9
第3節 まとめ .....	10
第3章 矢部南遺跡第2次発掘調査の成果 .....	11
第1節 調査の契機とその至る経過 .....	11
第2節 調査の成果 .....	11
1. 調査の方法 .....	11
2. 発掘調査日誌抄 .....	11
3. 層序 .....	12
4. 遺構 .....	13
(1) 縄文時代 .....	13
(2) 弥生時代 .....	14
(3) 古代・中世 .....	25
5. 遺物 .....	27
(1) 縄文時代 .....	27
(2) 弥生時代 .....	28
(3) その他の時代の土器 .....	32
(4) 石器 .....	32
第3節 まとめ .....	33

## 図版目次

- 図版1 欠部南遺跡全景  
昭和23年 航空写真（上が北）
- 図版2 第1次調査  
1. 調査前風景（第I調査区東から）  
2. 第II調査区西壁土層堆積状況  
(S-24東から)  
3. 第II調査区調査風景（北東から）
- 図版3 第2次調査 遺構1（検出状況）  
1. 調査前風景（東から）  
2. 弥生遺構検出状況（南西から）  
3. 中世遺構検出状況（南西から）
- 図版4 第2次調査 遺構2（ST-101）  
ST-101（方形周溝墓）完掘状況
- 図版5 第2次調査 遺構3（ST-101）  
1. SD-102遺物出土状況1  
(北西から)  
2. SD-102遺物出土状況2  
(北西から)  
3. SD-101北壁土層堆積状況  
(南から)
- 図版6 第2次調査 遺構4（ST-102）  
ST-102（方形周溝墓）完掘状況  
(東南から)
- 図版7 第2次調査 遺構5（ST-102）  
1. SD-103遺物出土状況1  
(北東から)  
2. SD-103遺物出土状況2  
(北から)  
3. SD-103北壁土層堆積状況  
(南から)
- 図版8 第2次調査 遺構6（弥生～中世）  
1. SD-105完掘状況（南から）  
2. SD-106完掘状況（東南から）  
3. 中世素掘り小溝完掘状況  
(南西から)
- 図版9 第2次調査 遺物1  
(縄文土器・弥生土器集合)
- 図版10 第2次調査 遺物2  
(ST-101・102)  
弥生土器1
- 図版11 第2次調査 遺物3  
(ST-101・102)  
弥生土器2
- 図版12 第1・2次調査 遺物  
(弥生土器・石器)  
1. 第2次調査 弥生土器3  
2. 第1・2次調査 石器

## 挿 図 目 次

第1図 矢部南遺跡の位置図	1
第2図 矢部南遺跡周辺の遺跡分布図	5・6
第3図 第1次調査地の位置図	7
第4図 第1次調査地配置図と基本土層断面図	8
第5図 第1次調査の出土石器実測図	9
第6図 第1次調査の出土土器実測図	10
第7図 第2次調査地の位置図	11
第8図 第2次調査地配置図と基本土層断面図	12
第9図 S T - 101遺構平面図及び北壁土層断面図	15
第10図 S D - 102遺物出土状況 平面図・立面図・断面図	17
第11図 S T - 102遺構平面図及び北壁土層断面図	19
第12図 S D - 103遺物出土状況 平面図・立面図・断面図	21
第13図 S D - 105・106遺構平面図及び北壁土層断面図	22
第14図 第2次調査の弥生時代遺構配置図	23・24
第15図 第2次調査の中世遺構配置図と周辺条里図	25
第16図 SK - 01・02遺構平面図及び立面図	26
第17図 第2次調査出土の凸帯文土器実測図	27
第18図 S D - 102の出土土器実測図1	28
第19図 S D - 102の出土土器実測図2	29
第20図 S D - 103の出土土器実測図1	30
第21図 S D - 103の出土土器実測図2・SD - 104の出土石器実測図	31
第22図 第2次調査の出土土器実測図・出土石器実測図	32
第23図 矢部南遺跡と多遺跡の位置関係図	35

## 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	5・6
-------------	-----

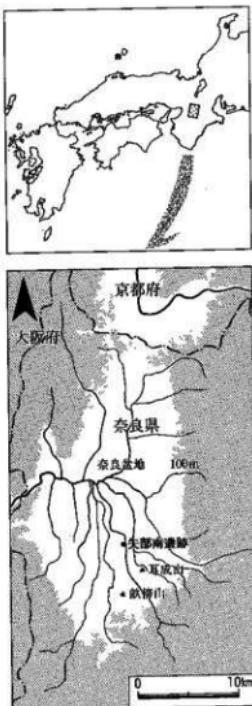
# 第1章 矢部南遺跡の位置と環境

## 第1節 地理的環境

矢部南遺跡は、奈良県磯城郡田原本町大字矢部に所在する縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。今回の第1次調査が行われるまでは、矢部の旧池を範囲とする遺物散布地であった。1995年、旧池の遺物散布地周辺で、田原本町産業振興課による田原本町単独土地改良事業が計画された。近くには团栗山古墳やタカツキ古墳があり、削平古墳が埋没している可能性があった。このため田原本町教育委員会では、1996年と1997年の冬に事前調査を行い、旧池遺物散布地の範囲が拡がることを確認し、遺跡の名称を矢部南遺跡とした。奈良県遺跡地図では、平成10（1998）年3月の改訂版から登録されている。

矢部南遺跡は、田原本町の中心街である近鉄田原本駅周辺から南西へ約2km、矢部集落南側の田園に位置する。また、行政区的には田原本町の南端にあたり、橿原市と近接している。本遺跡の立地は、周囲に水田が広がる現状からは平坦地であるかのように見える。しかし、地図上の等高線からは、南東から北西に向かう緩やかな傾斜地であることが読み取れる。田原本町内の遺跡としては奈良盆地東南縁辺の丘陵部により近く、標高約50mと比較的高い位置にある。

矢部南遺跡の西側には曾我川、東側には飛鳥川が北流する。これらは奈良盆地内の他河川と合流して大和川となり大阪湾に注ぐ。本遺跡の東側を流れる飛鳥川は、急角度に流路方向が変化することから、人手が加わっていることは明白である。これは発掘調査でも、多遺跡の弥生時代環濠を分断して、現在の飛鳥川が北流していることを確認している。当初の流路方向でなかったことが弥生遺構との関係から認識できる。本来の飛鳥川は、自然地形の南東から北西への傾斜や条里の乱れなどから、矢部南遺跡および多遺跡の南側を流れて、曾我川に合流していたと考えられる。矢部南遺跡および多遺跡の旧景観は、旧寺川と旧飛鳥川および旧曾我川の2大河川に挟まれた微高地として復元できる。ただし、多遺跡第10次発掘調査における遺跡西側の旧河道による乱流痕跡や、矢部南遺跡第1次や第2次調査で検出した旧河道からは、微高地を侵食して流れる幾重もの支流の存在がうかがえる。これによれば、多遺跡と矢部南遺跡の間には、南東から北西に延びる谷状の落ち込みが想定される。おそらく、この谷のよって多遺跡と矢部南遺跡は隔てられていたのであろう。



第1図 矢部南遺跡の位置図

## 第2節 歴史的環境

矢部南遺跡からは、2次の調査を通じて縄文時代から近世までの遺物が出土している。しかし、遺構が確認できたのは、弥生時代中期後半の方形周溝墓と古代・中世の素掘り小溝や土坑など、わずかで時代も限られる。縄文時代晚期の凸帯文土器や古墳時代の土師器、須恵器は2次堆積遺物にすぎない。ただし、付近には縄文時代後期の遺構が検出された秦之庄遺跡、古墳時代後期の豊富な副葬品を出土した团栗山古墳、あるいは延喜式内社の多神社があり、細長い調査区では明らかにしえなかった各時代の遺構が埋没している可能性は高い。矢部南遺跡は、農業振興地域内にあるため開発の波からは逃れ、幸か不幸かこれから発掘調査が行われる可能性は低い。こうした状況であればこそ、周辺の歴史的環境を概観することは、矢部南遺跡を地域に位置づけることであり、遺跡の性格を検討する為にも、必要な作業といえよう。

**旧石器時代** 従来、奈良盆地低地部に旧石器時代の遺跡は皆無と考えられてきた。しかし、保津・宮古遺跡<sup>①</sup>第11次調査において、有茎尖頭器の検出が報告された。<sup>②</sup>アイラ火山灰の2次堆積層よりも下位にある砂混じり黒色粘質土中からの出土であるという。従来、砂混じり黒色粘質土は、無遺物層と考えられてきた。その概要報告には、有茎尖頭器の図面および写真は掲載されていないが、奈良盆地低地部における縄文時代草創期遺物の初検出例である。それならば前史となる旧石器時代の奈良盆地低地部が、全く人の活動出来ない状態にあったのか疑ってみる必要もあるう。

この視点からすれば、今回の矢部南遺跡第1次調査も含めた矢部地区周辺において、石器のみが検出される遺物包含層の存在は注目される。国道24号線バイパス建設予定地の1977年度調査において、下島井地区の地山である黄色粘土層上面に堆積した暗褐色土の下面から、土器を伴わずサヌカイト片が若干出土した。<sup>③</sup>同様に、矢部遺跡<sup>(9)</sup>第2次調査においても、地山となる黄褐色あるいは青灰色粘質土の直上において、サヌカイト製の石器のみが検出された。矢部南遺跡の調査知見からすれば、暗褐色系堆積土の上面が弥生遺構検出面であり、それよりも下位における石器単独の出土は、旧石器の可能性を期待させる。ただし、縄文時代の石器である可能性も否定できない。それは、近接する多遺跡の地層探索調査で、石器が単独で出土した層に対応すると考えられる土層に6000年以降の年代が与えられていることによる。良好な資料の増加を待ちたい。

**縄文時代** 矢部南遺跡第2次調査において、縄文時代晚期後半の凸帯文土器が検出された。かつて、矢部南遺跡周辺においては、矢部遺跡<sup>(9)</sup>から摩耗した縄文時代後期土器の山土と、多遺跡<sup>(2)</sup>での縄文時代後期あるいは晚期土器の採集が知られるのみであった。しかし、近年の発掘調査において、矢部南遺跡より東方約700mにある秦庄遺跡<sup>(14)</sup>では、遺構に伴って縄文後期土器が出土している。また、矢部南遺跡周辺よりも標高の低い保津・宮古遺跡<sup>(1)</sup>から、縄文時代後期の土器が検出されている。盆地内部においても、微高地ならば縄文時代人の活動が確実に後期まで湧ることが明らかになりつつある。

縄文時代晚期後半の凸帯文土器ともなれば、その出土地はさらに増加し、唐古・健遺跡<sup>(5)</sup>、清水風遺跡<sup>(6)</sup>、八尾九原遺跡<sup>(7)</sup>、保津・宮古遺跡<sup>(1)</sup>、土橋遺跡（小槻遺跡）<sup>(4)</sup>などが知られる。ただし、これらの遺跡で、凸帯文土器単純の包含層あるいは遺構を確認したわけではない。今後の調査によって、良好な縄文時代の遺物とともに遺構の検出されることが期待される。

弥生時代 矢部南遺跡第2次調査において検出された弥生時代中期中葉（大和第III-3・4様式）の方形周溝墓2基は、南東約200mに隣接する多遺跡<sup>(2)</sup>との関連が想定される。多遺跡は、弥生時代前期から後期におよぶ奈良盆地の弥生拠点集落の一つであり、古墳時代にも集落は継続している。近年行われた第19次調査では、遺跡東側の環濠5条が確認された。この調査及び第10・11次調査をもとに多遺跡は、東西幅約350mの範囲が想定されている。しかし、これは弥生時代前期末から中期初頭にかけての溝から想定されたものであって、それ以降の遺跡範囲が判然としない。調査地点毎に、検出される遺構・遺物の時期が異なっており、推定される遺跡範囲において濃密で継続的な居住が行われていたとは考えにくい。さらには、矢部南遺跡で検出された方形周溝墓と対応する弥生時代中期の遺構分布もよく分かっていない。

その他、付近の拠点集落としては橿原市の中曾司遺跡<sup>(3)</sup>があるが、調査面積が狭く遺跡の実態は明らかでない。近年、中曾司遺跡から北東へ約600mの位置にある土橋遺跡<sup>(4)</sup>では、弥生時代中期前葉（大和第III-1・2様式）の方形周溝墓が25基検出されている。中曾司遺跡の墓域となる可能性が高い。また、中曾司遺跡から南へ約200mの西曾我遺跡では、弥生時代中期後葉（大和第IV様式）の短期的な遺構が検出されている。中曾司遺跡の衛星集落とも考えられる。また、欠部南遺跡の西約500mには、佐味遺跡<sup>(8)</sup>がある。水路工事の際に、弥生時代中期中葉（大和第III-1様式）と後期末（大和第VI-4様式）の土器が採集されている。

古墳時代 弥生時代の拠点集落であった多遺跡<sup>(2)</sup>からは、庄内期から古墳時代後期までの多数の土器や遺構が検出されており、古墳時代においても全期間を継続する集落であったと考えられる。また、多遺跡の北側に隣接する秦庄遺跡<sup>(4)</sup>からは、5世紀末の須恵器と共に区画溝とその溝方向に平行する掘立柱建物が検出されている。区画溝の上層埋土には6世紀後半の須恵器が含まれており、その時期には集落の廃絶が窺える。多遺跡と秦庄遺跡は隣接し、両遺跡は時間的にも併行する。弥生時代からの立地を継承する多遺跡と、5世紀末に出現し6世紀後半には廃絶する秦庄遺跡には、集落として何らかの性格の違いがあるとも考えられる。

周辺の古墳には、矢部南遺跡を調査する契機となった著名な团栗山古墳<sup>(5)</sup>がある。团栗山古墳は、現状で直径30mの円墳状を呈するが、墳形および周辺施設の有無は不明である。墳丘は、昭和11年の道路工事に伴う土取りによって半分以上が運び出され平坦になっているが、本米は3m強の高さがあったとされる。その土取りによって多数の副葬品が出土した。現在、東京国立博物館に、須恵器・土師器・龍雀鏡頭・馬具・鉄器片が保管されている。内部主体については、土取り時に石材は認められず、若干の木片を伴ったことから、木棺直葬墳であったと考えられる。木棺直葬墳と考えられるにもかかわらず、東京国立博物館蔵の須恵器群は、6世紀中葉から7世紀初頭の複数型式を含んでいる。このことから、墳丘内に複数の主体部があった可能性も考えられる。一方、付近には平坦なタカツキ古墳<sup>(6)</sup>があり、团栗山古墳と同様に土取りを受け、その出土遺物が混乱した可能性もある。この他、昭和初期の島本報文によれば、团栗山古墳の北方にはキミドノ古墳が残存していたとあり、付近一帯に古墳群が形成されていた可能性は高い。

また、团栗山古墳から北西へ約500mの矢部遺跡<sup>(9)</sup>からは、墳丘をもたない方形区画墓群が検出されている。方形区画墓群は、その出土土器から古墳時代初頭（3世紀末）より古墳時代後期（7世紀前半）まで継続して築造されたと考えられている。調査を担当した寺沢薰氏は、团栗山古墳とは同一微高地、同一墓域内にあると考えている。

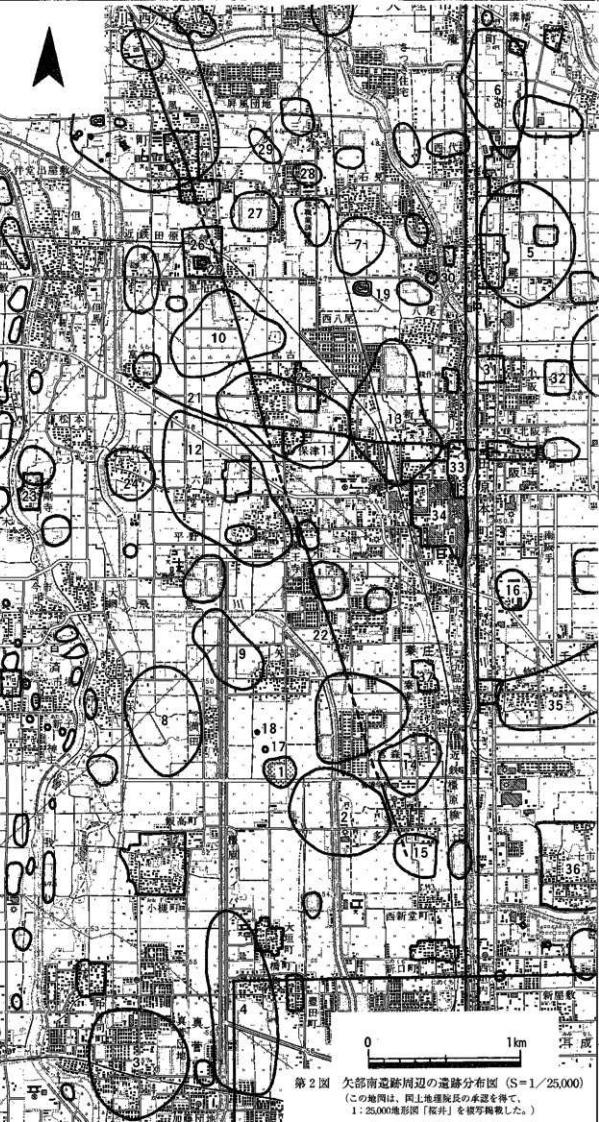
古代 従来、田原本町周辺はこの時期の遺構が希薄な地域と考えられてきた。しかし、保津・宮古遺跡第14次・第18次調査では、筋違道<sup>註1)</sup>やこれに交差する斜行道<sup>註2)</sup>の遺構と考えられる側溝とともに、奈良時代の墨書き土器や土馬が出土している。これらの調査により、「太子道」と呼ばれる伝承的であった筋違道の実在が現実味を帯びるようになった。矢部南遺跡周辺においても、多遺跡の東側にある条里の乱れが筋違道の痕跡と推定されている。かって、この条里の乱れの南延長線に交差した東西水路で奈良県立橿原考古学研究所が多遺跡<sup>註3)</sup>第9・第10・第11次調査を行い、南北方向の河川跡から7世紀末を中心とする遺物を検出している。河川跡は、幅が10m、深さ2.5m以上で人工の可能性は薄い。それでも、筋違道の実在が現実味を帯びた今日、それに位置や方向、出土遺物の年代が一致した河川跡は注目される。

また、多遺跡周辺からは、遺構には伴わないが奈良・平安時代の瓦片や土師器・須恵器片が出土する。第11次調査においては、上面が中世造構面となるそれ以前の遺物包含層中より、神功開寶<sup>註4)</sup>が奈良時代の瓦片や土師器小皿片とともに出土した。これらの遺物は、遺跡範囲内にある延喜式内社の多神社との関係も考慮に入れておく必要があろう。なお、多遺跡周辺は、古代末から中世にかけて水田となっていたようで、耕作土と考えられる灰色系の粘土層が広がる。

- 註1) 橋本裕行 1995 「田原本町 保津・宮古遺跡第9-b次・第10次・第11次発掘調査概報」  
〔奈良県遺跡調査概報（第一分冊）1994年度〕奈良県立橿原考古学研究所
- 註2) 中井一夫 1978 「田原本町矢部地区試掘調査概報—国道24号線バイパス建設予定地—」  
奈良県立橿原考古学研究所
- 註3) 佐々木好直 1985 「奈良県磯城郡田原本町矢部遺跡第2次調査発掘調査概報」  
〔奈良県遺跡調査概報（第一分冊）1984年度〕奈良県立橿原考古学研究所
- 註4) 寺沢 薫 1986 「矢部遺跡」〔奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第4十九冊〕  
奈良県立橿原考古学研究所
- 註5) 林郡 均 1992 「田原本町秦之庄遺跡発掘調査概報」〔奈良県遺跡調査概報（第一分冊）1991年度〕  
奈良県立橿原考古学研究所
- 註6) 清水琢哉 1997 「保津・宮古遺跡第18次調査」〔田原本町埋蔵文化財調査年報〕6)  
田原本町教育委員会
- 註7) 小栗明彦 1999 「多遺跡 第19次発掘」〔大和を掘る17 1998年度発掘調査速報展〕  
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 註8) 橿原市教育委員会 1997 「土橋遺跡の調査」〔平成8年度奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料〕奈良県内市町村埋蔵文化技術担当者連絡協議会
- 註9) 鶴口真広 1999 「西曾我遺跡の調査」〔かしはらの歴史をさぐる6 - 平成9年度埋蔵文化財発掘調査報告展-〕奈良県立橿原市千塚資料館
- 註10) 烏木 一 1936 「大和磯城郡多村矢部の一古墳」〔大和誌〕第3巻8号)
- 註11) 註4) に同じ
- 註12) 清水琢哉 1997 「保津・宮古遺跡 第18次調査」〔田原本町埋蔵文化財調査年報〕6)  
田原本町教育委員会
- 註13) 佐々木好直 1985 「田原本町多遺跡第9次発掘調査報告書」〔奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1984年度〕奈良県立橿原考古学研究所
- 註14) 寺沢 薫 1986 「田原本町多遺跡第11次発掘調査報告書」〔奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1985年度〕奈良県立橿原考古学研究所

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種類	時代	遺跡性質	主な
1	大前田遺跡	福島郡田村町大前田字中野原	遺跡	古墳、古墳	火打山、井戸、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
2	II-C-49 多多賀	。 多々賀(まほか)	遺跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
3	14-A-11 中曾司遺跡	中曾司、上郷町、宮代町	集落跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
4	14-A-12 上郷遺跡	中曾司河原堂住小	集落跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
5	II-A-66 駒ヶ谷遺跡	福島郡田村町駒ヶ谷字ソノ田、駒ヶ谷字上岸はか	集落跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
6	II-A-80 泉水風呂跡	天津町風呂治場(風呂風、成城郡田村町天津老ノ坪)	遺跡	古墳、古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
7	11-A-38 八尾寺遺跡	。 二郎寺(じろうじ)、本丸(ほんまる)、外丸(ほかわる)	遺跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
8	佐味遺跡	福島郡田村町佐味字佐味赤坂、佐味字御前住小	遺跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
9	II-C-49 久慈遺跡	。 大曾(おおぞな)コロブナ(ころぶな)、日本(にっぽん)	遺跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
10	II-A-72 宮古北遺跡	宮古字台合はか	遺跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
11	II-C-33 保津・吉古遺跡	。 吉古寺(よこじ)道、保津字伊多敷(いだしき)	集落跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
12	II-C-32 十六割・裏工寺遺跡	。 十六割(じゅうろく)半山内、裏工寺字下御田内はか	遺跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
13	II-C-33 朝日御跡	。 八尾寺(やよいじ)池内、御坂字木子(きこ)はか	遺跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
14	II-C-125 鹿生遺跡	。 鹿生寺(ろくじ)	集落跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
15	II-C-68 参新交遺跡	。 多字大平(おほひら)川、参新(さんしん)川	遺跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
16	II-C-20 駒子御跡	。 駒子御(こまこご)御(ご)	遺跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
17	II-C-71 仲間(なかま)八幡	。 大曾(おおぞな)八幡(やわた)古墳	古墳	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
18	II-C-72 ナカミヤ八幡	。 大曾(おおぞな)八幡(やわた)400	古墳	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
19	II-A-21 駒崎御跡	。 八尾寺(やよいじ)門前	古墳	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
20	II-A-77 黒田大坂古墳	。 黒田大坂(くろだおさか)300	古墳	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
21	II-C-4 駒子御跡	。 駒子御(こまこご)近江(おうみ)	遺跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
22	II-C-32 神須(じんす)寺(てら)	。 神須寺(じんすてら)	寺院跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
23	II-C-103 今里(いまざと)寺(てら)	。 金剛院(こんごういん)字子(こ)	寺院跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
24	II-C-30 西竹寺(せいちくじ)遺跡	。 西竹寺(せいちくじ)字下御田(しもみち)	遺跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
25	II-C-10 今里(いまざと)寺(てら)	。 今里寺(いまざとてら)	寺院跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
26	II-A-83 黒田御跡(くろだごせき)	。 黒田寺(くろだてら)字古坂内(こざかうち)	寺院跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
27	II-A-35 井安遺跡	。 井町御(いのまちご)	遺跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
28	II-A-84 丸沢遺跡	。 丸沢(まるざわ)	遺跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
29	II-A-29 桜井(さくらい)ニエゲ遺跡	。 伴寺	遺跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
30	II-A-49 石見御跡	。 石見寺(いみてら)	寺院跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
31	II-C-99 小坂・駒木遺跡	。 四岡木斯(よおか)字中(なか)はか	寺院跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
32	II-C-108 小坂御木遺跡	。 小坂寺(こさかてら)	寺院跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
33	II-C-95 平野寺御跡	。 宇坂(うさか)内(うち)はか	寺院跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
34	II-C-105 三内町遺跡	。 宇坂寺(うさかてら)	寺院跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
35	II-C-96 千葉寺(ちばてら)遺跡	。 千葉寺(ちばてら)	寺院跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
36	II-C-96 千葉寺(ちばてら)遺跡	。 千葉寺(ちばてら)	寺院跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室
37	II-C-104 (豪農小耕)	(豪農小耕)	寺院跡	古墳	火打山、土塁、石垣、石室、石室	火打山、土塁、石垣、石室、石室



第2図 南部古遺跡周辺の遺跡分布図(S=1/25,000)  
(この地図は、国土地理院版の承認を得て、  
1:25,000地形図(「桜井」)を複数枚接続した。)

## 第2章 矢部南遺跡第1次発掘調査の成果

### 第1節 調査の契機とその至る経過

1995年秋、田原本町教育委員会に本町産業振興課より矢部地区における田原本町単独土地改良事業計画の問い合わせがあった。場所は、昭和11年に多数の遺物を出土した团栗山古墳から西へ約60m離れた土水路であった。工事は、既存の土水路をコンクリート張りにするもので、現水路底面から深さ約50cmほどの掘削を行った。

本地は周知の遺跡ではなかったが、古墳群の範囲である可能性があった。現状確認は不可能でも、発掘調査によって削平古墳が検出される例がある。このため、本町教育委員会では、本町産業振興課に発掘通知の届け出を要請した。これを受け、本町産業振興課では1996年10月に発掘通知を県教育委員会に提出した。本町教育委員会では県教育委員会の指示を受け、1996年11月18日から11月25日まで試掘調査を行った。



第3図 第1次調査地の位置図 (S=1/10,000)

### 第2節 調査の成果

#### 1. 調査の方法 (第4図)

本地は周知の遺跡として認知されておらず、現地表面での遺物散布は認められなかった。このため調査は工事立会とし、遺物包含層や遺構が検出された場合には工事を停止する方法を探った。その結果、多少の遺物は出土したが遺構は認められず、調査は土層断面図を作成し終了した。なお、幅25mで総延長210mに及ぶ調査区は、その屈曲に応じI・II・IIIに3区分した。

#### 2. 発掘調査日誌抄

11月18日 (月) 晴れ 作業員 6人

八尾九原遺跡の調査中であるが、現場初日のため作業員全員を欠部南遺跡に投入。第Ⅰ調査区の掘削。現水路のヘドロ底下は、第Ⅱ層：黒褐色粘土質。調査区の途中で砂層の落ち込みがあり、河川跡 (SR-101) と推測。

11月19日 (火) 晴れ 作業員 4人

昨日、顯著な遺構が見あらなかったことから、八尾九原遺跡に作業員 2人戻す。第Ⅱ調査区の掘削。第Ⅲ層：灰色粘土層から若干の遺物出土。第Ⅳ層：暗灰褐色粘土よりサスカイト製スクレイパー出土。

11月20日 (水) 晴れ 作業員 4人

第Ⅱ調査区南半の掘削。遺構なし。

11月21日 (木) 晴れ 作業員 3人・補助員 2人

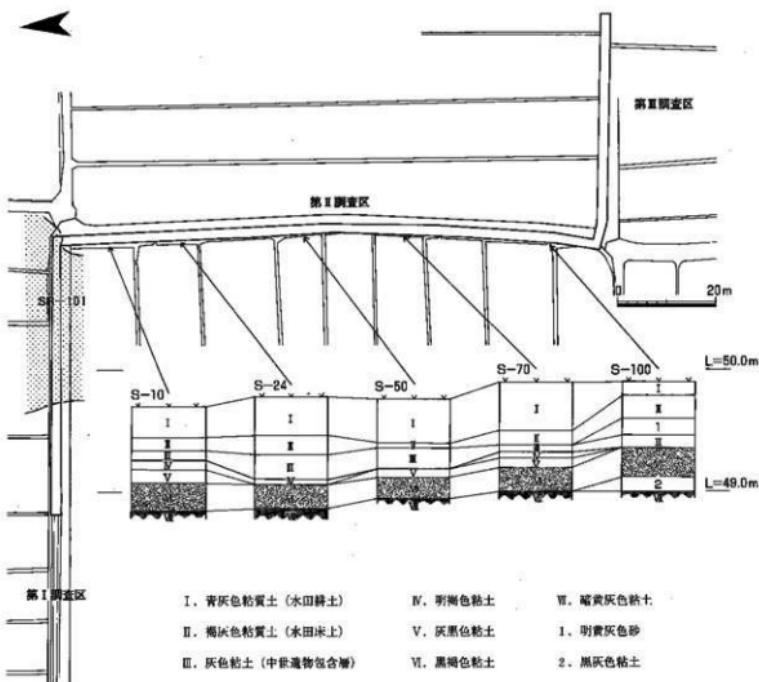
第Ⅱ調査区の機械掘削が終わり、第Ⅲ調査区に移動。壁面清掃。土層線引き。午後から補助員 2名、平板測量。

11月22日 (金) 晴れ 作業員 3人・補助員 1人

第Ⅲ調査区の掘削と壁面清掃。午後から補助員 1名、第Ⅰ・Ⅱ調査区の土層断面図作成。

11月25日 (月) 晴れ 作業員 3人・補助員 1人

補助員 1名とともに第Ⅱ調査区の一部と第Ⅲ調査区の土層断面図完成。午前中で現場終了。

第4図 第1次調査地配置図 ( $S=1/1,000$ ) と基本土層断面図 ( $S=1/40$ )

### 3. 層序

本調査地における基本的な上層堆積状況は以下の通りである。(第4図)

第Ⅰ層：青灰色粘質土（水田耕土）、第Ⅱ層：褐灰色粘質土（水田床土）、第Ⅲ層：灰色粘土（中世遺物包含層）、第Ⅳ層：明褐色粘土、第Ⅴ層：灰黑色粘土、第Ⅵ層：黒褐色粘土、第Ⅶ層：暗黄灰色粘土（石器包含）。

第Ⅰ層：青灰色粘質土は、現在の水田耕土層である。その上面標高は49.80mを前後として、南の50.00mから北の49.70mへと軽く傾斜する。その厚さは約30cmである。第Ⅱ層：褐灰色粘質土は、水田の床土層である。その上面標高は49.50mを前後とする。第Ⅲ層：灰色粘土は、中世水田の耕土層と考えられる。第Ⅲ層は、上面標高が49.40m前後で、層の厚さは10cmほどである。第Ⅳ層：明褐色粘土の上面は、周辺の調査例から弥生あるいは古墳時代の遺構面と考えられる。その上面標高は、49.30m前後である。この第Ⅳ層から以下の土層は、よく締まった粘土層であった。第Ⅶ層：暗黄灰色粘土中からサヌカイト製スクレイパーが単独出土した。

#### 4. 遺構

第Ⅰ調査区の東半において、植物遺存体や摩滅した土師器・須恵器を含んだ河川跡（SR-101）を1条検出したのみである。（第4図）

なお、遺構ではないが、第Ⅶ層：暗黄灰色粘土中からのサヌカイト石器の検出は特筆できる。第Ⅱ調査区のS-24付近で西側排水溝を掘削した際、第Ⅶ層：暗黄灰色粘土中から風化したサヌカイト製スクレイパーが出土した。その出土位置の標高は48.80mである。遺物はスクレイパー1点のみで、土器は伴出していない。このような出土状況は今回の調査だけにとどまらず、本調査地西側において行われた昭和52年度のバイパス調査でも、同じような状況で土器を伴わずサヌカイト片が出土したとされる。このことから、矢部南遺跡周辺では、弥生・古墳時代の遺構検出面よりも下位に、現在のところ土器を伴わずサヌカイト片のみが出土する黄色系の粘土層の拡がりが想定される。この黄色系の粘土層の年代については、今回出土したサヌカイト製スクレイパーが時期決定の困難な石器であるため、限定することはできない。ただ、層位的には確実に弥生時代よりも古い文化層である。

#### SR-101

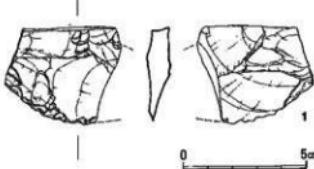
SR-101は、第Ⅰ調査区の東半で検出した河川跡である。その検出面は、第Ⅵ層：黒褐色粘土の上面、標高49.00mである。SR-101は、調査区内において幅32mの規模をもち、南から北へ流れているようであるが調査区幅が狭く、正確な規模や流路方向は不明である。その上面には厚さ20cmほどの淡灰色粘土が堆積していた。その下は青灰色シルト層であったが、湧水が激しく、それ以下の掘削は不可能であった。埋土に含まれた須恵器の小さな破片から、古墳時代以降に流れていたと考えられる。

SR-101は、本調査地から北西約200mのバイパス調査（西丁子・荒井田地区）で検出した河川跡につながる可能性が高い。ただし、西丁子・荒井田地区の河川跡はその上層に古墳時代前期の土器を含んでいたと報告されており、摩耗した須恵器を含んだ本河川跡とは時期が異なる。また、つながるとすれば、その間に位置するタカツキ古墳が問題である。流路上にあたると考えられる墳丘は、河川埋没後に築かれた中世の塚なのか、あるいは付近で急激に蛇行した河川跡が形成した自然堤防上に築かれているのだろうか。タカツキ古墳との関係も含め本河川跡は、時期や流れの方向など不明な点が多く、周辺発掘調査による情報の蓄積が必要である。

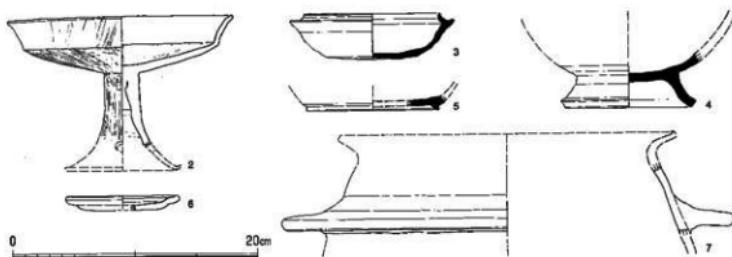
#### 5. 遺物（第5・6図）

図示可能な遺物は、第Ⅶ層：暗黄灰色粘土中のサヌカイト製スクレイパー以外、水田床上層の第Ⅱ層：褐灰色粘質土と中世遺物包含層の第Ⅲ層：灰色粘土からの出土である。

スクレイパー（第5図-1、図版12-6） サヌカイト製品。現長3.97cm、最大幅4.70cm、最大厚1.38cm、重量23.14gを測る。左面の左側縁には自然面を残しており、右側は欠損している。刃部は左面下側のみに作り出されている。左面上側を欠くが、成形以前の折れと考えられる。第Ⅶ層：暗黄灰色粘土中より出土し、石器の風化は著しく後縁が摩耗する。



第5図 第1次調査の出土石器実測図（S=1/2）



第6図 第1次調査の出土土器実測図 (S=1/4)

**弥生土器高坏（第6図-2）** 口縁部径18.4cm。口縁部は短く外反する。坏部は浅い。脚部は、細い柱状部が裾部に向かって開く形態であるが、その裾部の大半を欠損する。柱状部から裾部への変換部分には円形の透かし孔を配するが、欠損の為その数は不明である。色調は赤褐色を呈する。弥生時代後期後半。第II層：褐灰色粘質土（水田床土）出土。

**須恵器环身（第6図-3）** 器高3.7cm、立ち上がり部径11.1cm。立ち上がりは、短く内傾する。底部はヘラ起こし未調整である。焼成不良のため、摩耗が著しい。色調は灰青色を呈する。7世紀初頭。第III層：灰色粘土（中世遺物包含層）出土。

**須恵器台付壺（第6図-4）** 脚部径10.2cm。「ハ」の字に開く高台をもつ。脚端部は面をもち、外傾する。底面内側に指頭圧痕。古墳時代後期。第II層：褐灰色粘質土（水田床土）出土。

**須恵器坏（第6図-5）** 高台径10.8cm。底部に断面が方形の高台をもつ。奈良時代。第II層：褐灰色粘質土（水田床土）出土。

**土師器小皿（第6図-6）** 器高1.2cm、口径9.0cm。口縁部の立ち上がりは、ヨコナデによって2段となる。色調は赤褐色を呈する。11世紀後葉。第II層：褐灰色粘質土（水田床土）出土。

**土師器羽釜（第6図-7）** 鍔の径37.0cm。鍔部分のみの残存であるが、鍔よりも下位に胴部最大径をもつ丸底の器形が想定される。外面の鍔から下に煤付着、内面にこげ。11世紀後葉。第II層：褐灰色粘質土（水田床土）出土。

### 第3節　まとめ

今回の調査では、当初予想された削平古墳の検出はなく、また他時期の遺構等も見当たらなかった。しかし、第II層：褐灰色粘質土（水田床土）や第III層：灰色粘土（中世遺物包含層）には、古墳時代および古代の土師器や須恵器が含まれており、周辺に関連する遺構があることを想定させた。今回の幅狭い調査区が、遺跡の実態を正確に反映しているとは言い難い。今後も周辺での慎重な調査が必要である。その場合、第IV層：明褐色粘土の上面が古墳時代の遺構検出面になると考えられる。ただし、第IV層あるいは第V層：灰黒色粘土は、堆積が薄く削平を受け、部分的にしか残っていない。実質的には、第VI層：黒褐色粘土の上面が検出面となろう。なお、第VI層：黒褐色粘土よりも下位にある第VII層：暗黄灰色粘土は、石器を包含しており注目される。

## 第3章 矢部南遺跡第2次発掘調査の成果

### 第1節 調査の契機とその至る経過

田原本町産業振興課は、平成9年度（1997年度）に前年度から引き続き矢部地区の土地改良事業を計画した。工事は、旧池東側の東西土水路をコンクリート張りにするもので、現水路底面から深さ約50cmほどの掘削を伴った。旧池は遺物散布地であり、また東隣接地には多遺跡があり、何らかの遺構が検出される可能性があった。このため、本町教育委員会では、本町産業振興課に発掘通知の届け出を要請した。これを受け、本町産業振興課では1997年10月に発掘通知を県教育委員会に提出した。本町教育委員会では、県教育委員会の指示を受け、同年12月10日から12月24日まで発掘調査を行った。



第7図 第2次調査地の位置図 (S=1/10,000)

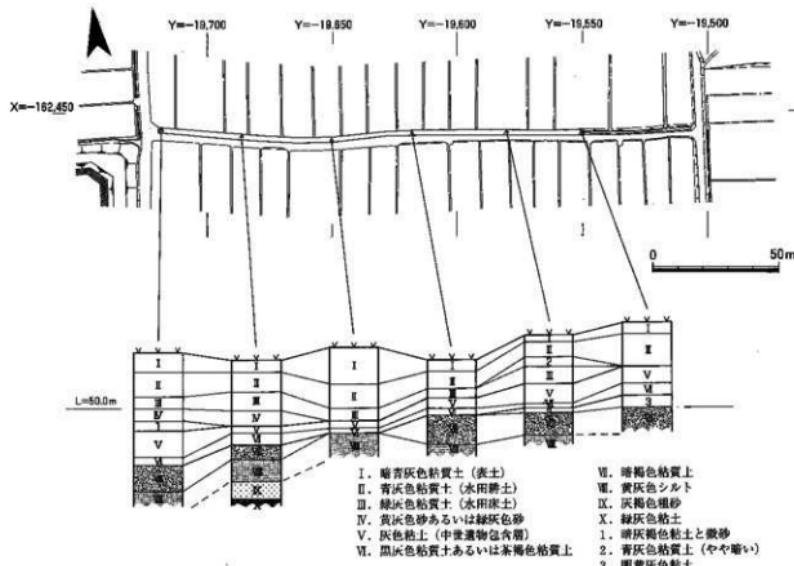
### 第2節 調査の成果

#### 1. 調査の方法（第8図）

当初、用水路工事の掘り方に従い、長さ170m、幅2.5m、深さ現地表から約1.5mの重機掘削に立ち会った。遺構が検出されない場合には、壁断面の土層観察で調査を終える予定であった。しかし、掘削を開始した直後の調査区西半において、弥生時代中期中葉の方形周溝墓を確認した。このため、掘削深度は工事掘り方より30cm浅い弥生遺構検出面の高さに合わせた。顕著な遺構が検出されなかった調査区東半では、再び工事掘り方高とし、壁断面の土層観察に切り替えた。

#### 2. 発掘調査日誌抄

- 12月10日（水）曇り 作業員 3人  
水路の西側から重機掘削。SD-101, SD-102を検出。SD-102の南壁側で、完形広口壺を確認。
- 12月11日（木）晴れ 作業員 4人  
引き続き重機掘削。SD-103, 104を検出。SD-103の北側排水溝から、無頬壺蓋出土。
- 12月12日（金）晴れ 後曇り 作業員 8人・補助員 2人  
重機掘削続く。調査区内の杭打ち。レベル移動と、トランシット測量。方形周溝墓の検出状況写真。
- 12月15日（月）晴れ 作業員 7人  
重機掘削終了。方形周溝墓の掘削。SD-102から生痕四輪車軸、高环出土。SD-103から広口壺出土。
- 12月16日（火）晴れ 作業員 8人  
現場西半水没。中世素掘り小溝の掘削。SD-104から、石鐵出土。明日の出土状況写真撮影の準備。
- 12月17日（水）曇り後雨 作業員 9人  
雨の為、午前中で現場中止。
- 12月18日（木）曇り時々晴れ 作業員 7人  
方形周溝墓の遺物出土状況撮影。出土状況図作成。
- 12月19日（金）晴れ 作業員 8人・補助員 2人  
SD-103の掘り下げ。SD-104・105の完掘。北壁土層断面および遺構平面図作成。
- 12月20日（土）曇り 作業員 8人  
方形周溝墓群の完掘状況写真撮影。土器取り上げ。
- 12月21日（日）晴れ 補助員 1人  
午前中、北壁土層断面図および平面図作成。
- 12月22日（月）晴れ 作業員 8人・補助員 2人  
土層断面図作成、平板測量。調査区東半の写真撮影。
- 12月24日（水）晴れ 作業員 8人・補助員 1人  
調査区東半、中世井戸の完掘写真。現場撤収。

第8図 第2次調査地配置図 ( $S=1/2,000$ ) と基本土層断面図 ( $S=1/40$ )

### 3. 層序

本調査地の現状は水路であり、これに沿って設定された調査区内は、第Ⅶ層：暗褐色粘質土まで搅乱されていた。ただ、調査区の掘削幅は現状水路よりも広く、北壁側は搅乱を受けていない現水田部分に達する。基本層序は、この北壁面の観察による。本調査地における基本的な土層堆積状況は以下の通りである。(第8図)

第Ⅰ層：暗青灰色粘質土(表土)、第Ⅱ層：青灰色粘質土(水田耕土)、第Ⅲ層：緑灰色粘質土(水田底土)、第Ⅳ層：黄灰色砂あるいは緑灰色砂、第Ⅴ層：灰色粘土(中世遺物包含層)、第Ⅵ層：黒灰色粘質土あるいは茶褐色粘質土、第Ⅶ層：暗褐色粘質土、第Ⅷ層：黄灰色シルト、第Ⅸ層：暗褐色粗砂、第Ⅹ層：緑灰色粘土

現地表の約50cm下までは、第Ⅰ～Ⅲ層の水田耕土層および底土層であった。その下には、第Ⅳ層：黄灰色砂あるいは緑灰色砂が薄く覆った第Ⅴ層：灰色粘土がある。第Ⅴ層：灰色粘土は、その中に瓦器碗小片を含んでおり、中世水田の耕土層と考えられる。第Ⅵ層：黒灰色粘質土あるいは茶褐色粘質土は、第Ⅴ層の直下にあり中世以前の遺物包含層と考えているが含まれる遺物は少なく、第Ⅶ層：暗褐色粘質土が第Ⅴ層の侵食を受け変色している可能性もある。第Ⅶ層：暗褐色粘質土は、その上面が弥生時代の遺構検出面となる。その上面は、標高49.80mである。今回、水路による搅乱が激しかったので、調査においてはその下の第Ⅷ層：黄灰色シルトを弥生時代遺構の検出面とした。以下は、第Ⅸ層：暗褐色粗砂、第Ⅹ層：緑灰色粘土と続く。なお、SD-105の底面において、第Ⅹ層の下に黑色粘土層を確認している。

#### 4. 遺構

今回の調査において検出した遺構は、弥生時代と古代・中世の2時期に大きく分かれる。また、遺構としては検出していないが、縄文時代晚期終末の凸帯文土器や古代の高坏が、帰属年代とは異なる遺構や遺物包含層中から出土している。

弥生時代の遺構は、弥生時代中期中葉の方形周溝墓2基（S T-101、102）に伴いそれぞれ2条（S T-101：S D-101,102）（S T-102：S D-103,104）ずつ、計4条の溝を検出した。また、方形周溝墓以外に検出した2条の溝（S D-105,106）は、方形周溝墓の溝と同じ暗褐色系の粘質土を堆積土とし、中世遺物包含層の第V層：灰色粘土よりも下位で検出されるので、弥生時代の可能性がある。ただし、S D-106はS T-102を削平した第VI層：黒灰色粘質土を切り込んでいるので、弥生時代中期中葉よりは確実に時期が下る。これら暗褐色系の粘質土を堆積土とする遺構は、いずれも調査区の西側3分の1に密集する。

古代・中世の遺構は、素掘り小溝3条と土坑2基である。上記の遺構と同じく、第V層：灰色粘土よりも下位で検出したが、遺構内堆積土は上層と同じ灰色粘土であった。

##### (1)縄文時代

遺構は検出されていないが、縄文時代晚期終末の凸帯文土器が集中する地点がある。弥生時代中期中葉の方形周溝墓、S T-101・102の周辺である。とくに、S T-101のその南東辺の溝となるS D-102からの出土量が多い。これに対し、その東に隣接するS T-102においては、南西辺の溝であるS D-103から若干量出土したが、北東辺の溝であるS D-104からの出土は認められなかった。このS D-104から東側の調査区では、凸帯文土器が出土しない。同様にS T-101の西側においても、S D-105から縄文土器と考えられる若干の小片は出土したが、それより調査区西端までの範囲で凸帯文土器の出土は認められなかった。あたかも、縄文時代晚期終末の凸帯文土器の分布と弥生時代中期中葉の墓域が重なっているかのようである。ただし、残念ながら発掘調査中には凸帯文土器に気付かず、後の洗浄によってその出土を認識したという経緯がある。現地において、凸帯文土器が出土した地点の精査および層位の確認は行っていない。凸帯文土器の包含層については、以下の可能性を想定している。

凸帯文土器の出土集中地点には、弥生時代中期中葉の方形周溝墓が構築されている。この方形周溝墓は、古代以前の遺物包含層と考えられる第VI層：黒灰色粘質土に削平を受け、第VII層：暗褐色粘質土の上面がその検出面であった。今回の調査では、第VIII層：暗褐色粘質土中から人工品の出土を確認していない。これらの調査状況からすれば、第VII層よりも上に縄文時代晚期の遺物包含層が形成されていたと想定するのが妥当であろう。ただ、今回の調査で検出した第VIII層：暗褐色粘質土と、第1次調査の第VI層：黒褐色粘土は極めて類似しており、同一層と考えている。第1次調査ではこれよりも下位の第VII層：暗灰黄色粘質土から石器を検出している。とすれば、第2次調査では遺物の認められなかった第VIII層：暗褐色粘質土ではあるが、弥生時代中期の方形周溝墓よりも古い縄文時代の遺物包含層となる可能性がある。第VIII層：暗褐色粘質土は、方形周溝墓群東側のY = -19,650m付近にある第VIII層：黄灰色シルト（第8図）の高まりを境に、東側と西側に堆積している。第VIII層：暗褐色粘質土を凸帯文土器の遺物包含層と想定するならば、その調査区西側3分の1への分布の偏りは、微高地西側の斜面堆積として理解されよう。

## (2) 弥生時代

## S T - 101 [ S D - 101, 102 ] ( 第9図、図版4・5 )

S T - 101は調査区の西側、座標にして  $Y = -19,688\text{m}$  から  $Y = -19,700\text{m}$  で検出した方形周溝墓である。墳丘は北西-南東あるいは北東-南西に主軸をもつと考えられ、今回の調査では墳丘の南隅を検出したことになる。また、墳丘を囲んだ南北辺 ( S D - 101 ) と南東辺 ( S D - 102 ) の周溝も検出している。

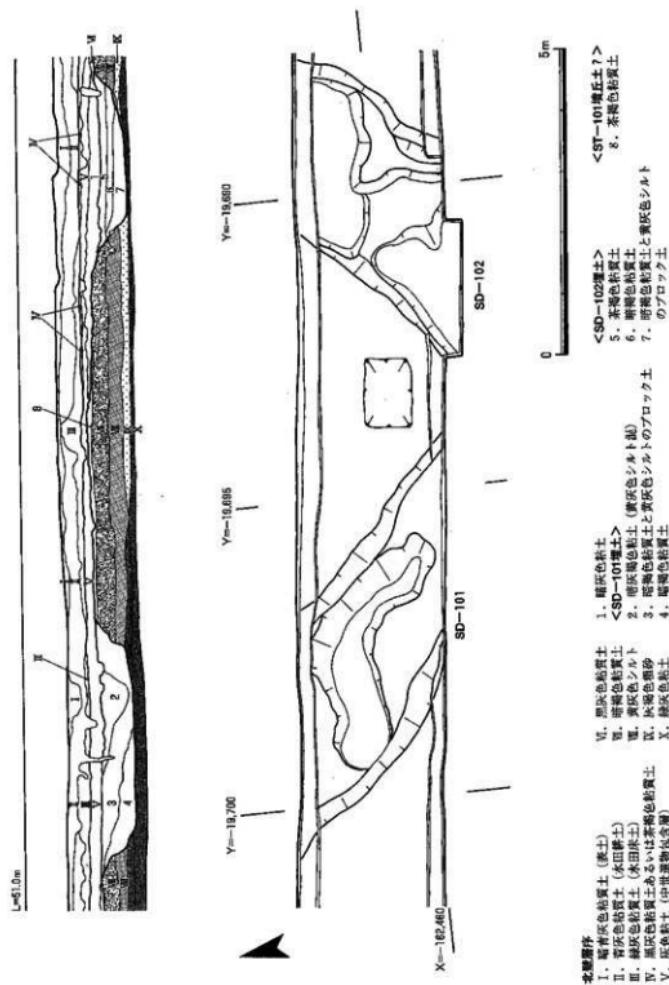
**墳丘** 墳丘は後世の削平を受け、周溝によって地山を削り出した基底部のみが残存する。このため発掘調査において墳丘と周溝は、第Ⅶ層：黄灰色シルトの上面、標高49.50mで同一検出した。ただし、調査区北側断面の土層観察によって弥生時代の遺構は、第Ⅷ層：暗褐色粘質土の上面、標高49.80mで検出できることが明らかになった。本来の遺構検出面よりも一層下位の検出となつたのは、周溝堆積土が検出面の第Ⅸ層と同様な暗褐色粘質土でその判別が困難であり、さらに現行水路の流水による搅乱を受けていたこともあって、遺構検出作業を削り気味に進めた調査技術的なことに起因する。なお、北壁断面の観察では S T - 101 の墳丘部分で、第Ⅸ層：暗褐色粘質土の上面に厚さ10cmにも満たない茶褐色粘質土を確認している。これを、上面からの染み込みによる第Ⅹ層：暗褐色粘質土の変色層なのか、墳丘盛土として考えるべきか判断がつかなかった。この茶褐色粘質土の上面標高49.90mが、現墳丘の最高標高である。これに対し、S D - 101 の底面は最も低く、標高49.10mを示す。両者の比高差0.8mが、現存墳丘高である。墳丘の長さに関しては、南隅を検出したのみにとどまるため正確な数値は不明であるが、調査区内の現状で短辺4m以上、長辺5m以上を測る。

**S D - 101** S D - 101は、北西-南東に軸をもつ墳丘南西辺の周溝である。その規模は、遺構検出面で幅約2.9m、深さ約0.3mを測る。溝底面は、調査区の中央が周囲より10cmほど落ち込んでいる。最も深い溝中央の底面標高は49.10mで、第Ⅹ層：緑灰色粘土に達する。

北壁断面の観察によれば、溝内の土層堆積は3層に分層することができる(図版5-3)。第1層：暗褐色粘土(黄灰色シルト混)は、第2層：暗褐色粘質土と黄灰色シルトのブロック土を切り込むように堆積しており、他遺構の切り込みである可能性もある。第2層：暗褐色粘質土と黄灰色シルトのブロック土は墳丘側の東から流れ込んで、周溝外側の西から流れ込んだ第3層：暗褐色粘質土の上に堆積している。おそらく第2層は、基盤面に周溝を掘削した際に生じた堆土の第Ⅸ層：暗褐色粘質土と第Ⅹ層：黄灰色シルトを盛上げて墳丘としていたものが、崩落したのであろう。周溝外側の西から流れ込んだ第3層が、暗褐色粘質土のみの単層であることもそれを裏付ける。遺物は、弥生土器小片が出土したのにとどまる。

**S D - 102** S D - 102は、北東-南西に軸をもつ墳丘南東辺の周溝である。その規模は、遺構検出面で幅約2.5m、深さ約0.6mを測る。溝底面の凹凸は激しく、溝方向に直交して土橋状に底面を残す部分がある。最も深い調査区南端での底面標高は49.20mである。溝底面は、第Ⅹ層：緑灰色粘土に達する。

北壁断面の観察によれば、溝内の土層堆積は3層に分層することができる。とくに、第3層は S D - 101 の第2層と同じ暗褐色粘質土と黄灰色シルトのブロック土であり、その堆積状況は墳丘側となる西からの流れ込みを示していた。なお、第1層の上面に暗灰色粘土の堆積が認められるが、これは S D - 102 が埋没した後、その窪地に堆積した古代以降の遺物包含層と考えられる。



第9図 ST-101遂井平面図及び北壁断面図 (S=1/80)

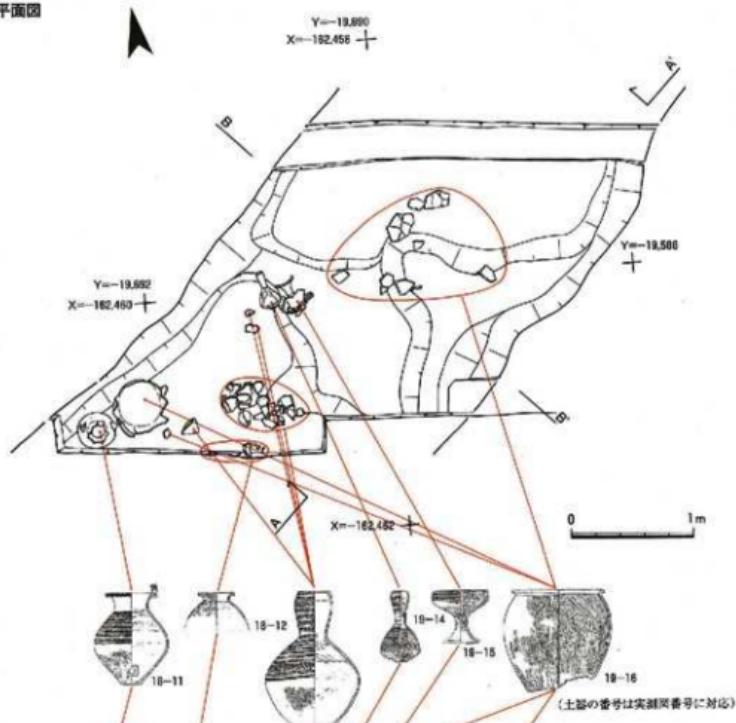
**遺物出土状況（第10図、図版5-1・2）** 方形周溝墓S T-101の南西辺周溝となるS D-101からは、ほとんど遺物が出土していない。これに対し、南東辺周溝となるS D-102からは、良好な状態で弥生時代中期中葉の土器が6個体分出土している。特に注目すべきは、墳裾に立てられた広口壺（第18図-11）と大甕（第19図-16）の2点である。墳丘南隅の近くで、墳裾に沿って北側に大甕、南側に広口壺が肩を接するように並び、直立したまま埋没していた。広口壺は完形で、大甕は底部を打ち欠いていた。両土器については、断面及び平面での土層観察を行ったが、土器の周囲を掘り込んだ形跡を認めることはできなかった。また、両土器を取り上げ後、その周囲の溝底面を精査した。大甕は、打ち欠き残されて突出した下半部が第X層：緑灰色粘土に食い込んでいる以外に、据え付け穴などの痕跡は認められなかった。広口壺においては、底部下面と溝底のレベルがほぼ一致していた。この検出状況からは、土器が倒れない程度に周溝が泥土で埋没した段階に、押さえ込むようにして据え置いたことが想定しうる。ただし、一方では土器を据え付けるにあたって溝堆積土の掘り込みはあったが、すぐに埋め戻されたため発掘調査では掘り方を検出できなかった可能性がないわけではない。結論を急ぐことは避けたい。

広口壺と大甕は直立していたため、その内部には空間なく粘土が堆積していた。内部の粘土は洗浄したが、骨などは検出されなかった。ただし、内部の粘土はよくしまっており、骨が残るには条件が悪い。広口壺は胴部下半に穿孔、大甕は底部を打ち欠いているがともに大型のため、その容量からは土器棺とも供獻土器とも断定はできない。ただ、土器棺であれば、土器片によって上蓋をするのが一般的で、内部に粘土が堆積した出土状況からは、上蓋があったとは考えられない。供獻土器であろうか。なお、大甕はその口縁部の北側約3分の2を欠いた状況で検出している。欠損した口縁部は、北側に約1mほど離れた溝中央で、標高49.50mを前後としてほぼ水平に散らばっていた。付近の溝底面の標高は49.25mで、破片が約25cmほど浮いていたことになる。このことから、ある程度周溝が埋没した後、直立する大甕の口縁部が、何か偶發的あるいは意図的に破損を受け、散らばったと想定される。口縁部が散らばっていた標高49.50m前後は、ちょうど第1層：茶褐色粘質土と第2層：暗褐色粘質土の層境にあたり、破片が水平に散らばることからも一定の期間は地表面であったと考えられる。

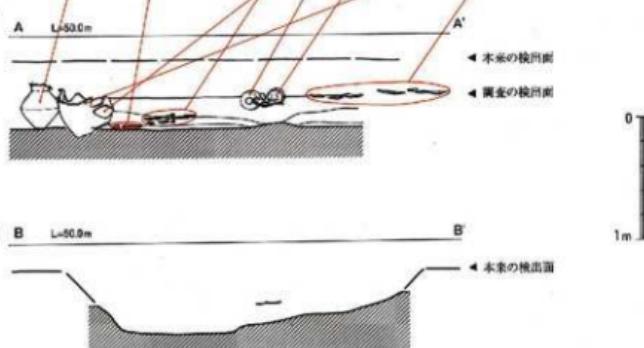
また、大甕本体と口縁部破片の間には、高坏（第19図-15）と生駒山西麓産の胎土をもつ細頸壺（第19図-14）が原形をとどめて割れていた。高坏と細頸壺は、口縁部の向きを正反対に横倒しの状態で接する。両者は溝底面より約25cmほど浮いた標高49.50m前後の検出であり、先の大甕・口縁部片と同一の埋没レベルである。この検出状況からは、大甕口縁部が割れて散らばった後、その間に細頸壺と高坏が置かれたか、あるいは転落してきたと想定される。細頸壺の下半部は、穿孔されていた。頸部が細く容量も小さい細頸壺、盛る器の高坏、これらは供獻土器であろう。

この他、溝底が標高49.23mと最も深い数値を示す調査区南端では、溝底面よりやや浮いた状態となる標高49.30m前後に、大型の細頸壺（第18図-13）と無文の広口壺（第18図-12）が割れて散らばっていた。先の細頸壺と高坏が原形をとどめて割れていたのにに対し、大型の細頸壺と無文の広口壺は破片が四散した状況であった。四散する破片は、この2点のものだけで、他の個体片は含んでいない。また、取り上げ後に接合を行ったが、両者ともに胴部下半の大半を欠損していた。これらは、周溝が掘削されてからかなり早い段階に、破碎されて撒かれたと考えられる。

平面図



立面図



第10図 SD-102遺物出土状況 平面図・立面図・断面図 (S=1/40)

**S T - 102 [S D - 103, 104] (第11図、図版6・7)**

S T - 102は調査区の西側、S T - 101の東に隣接して座標Y = - 19,672mからY = - 19,688mで検出した方形周溝墓である。検出した墳丘は、北隅側の一部である。これより想定される墳丘の主軸は、北西 - 南東あるいは北東 - 南西である。また、墳丘を囲んだ北西辺（S D - 103）と北東辺（S D - 104）の溝も検出している。S T - 102は先述したS T - 101に並列し、S T - 101の南東辺を囲む溝S D - 102とS T - 102の北西辺を囲む溝S D - 103との間隔は、わずかに0.6~1.0mであった。その間隔はあたかも道状を呈しており、S T - 101・102の土器群はこれに沿うようにS D - 102とS D - 103に集中した。

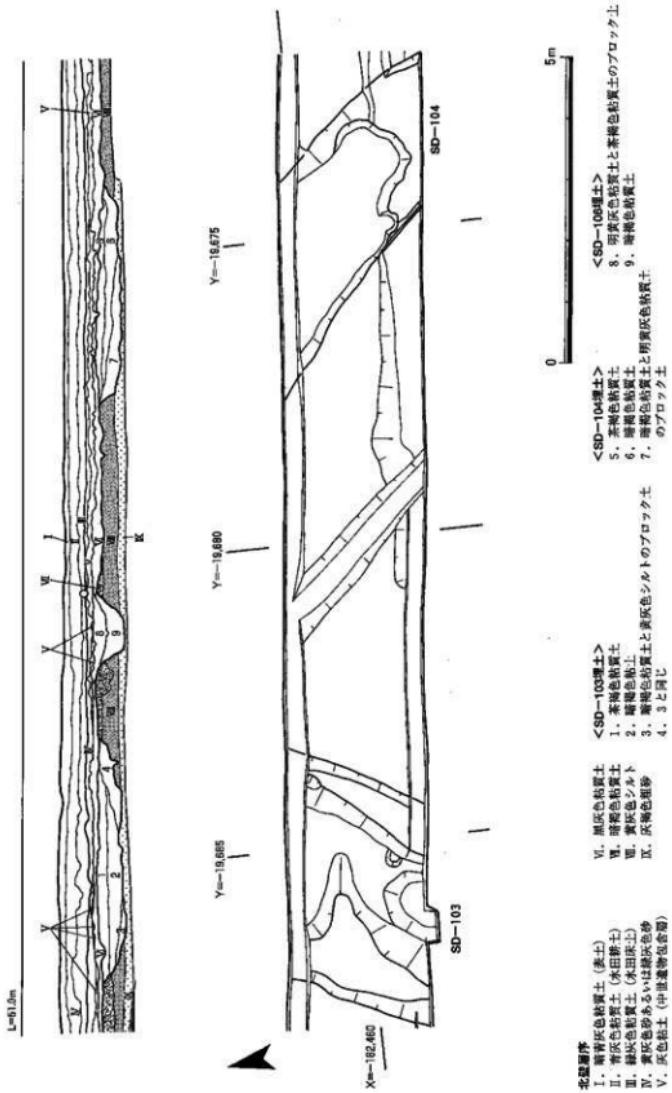
**墳丘** 墳丘は、先述したS T - 101と同様に後世の削平を受け、周溝によって削り出した基底部のみが残存する。このため墳丘と周溝は、第Ⅶ層：黄灰色シルトの上面、標高49.75mで同一に検出した。S T - 102についてはS T - 101の場合とは異なり、北壁断面に観察できる造構検出面と調査平面での造構検出面はほぼ同一のレベルである。これは、表土層の機械掘削が西から東へと進んだため、まずS T - 101を確認したことによりS T - 102の検出が慎重になったという調査技術的なことや、自然地形がS T - 102付近で高まり、第Ⅸ層：黄灰色シルトの上面が標高49.75mまで隆起していたことに起因する。自然地形は西から東に向かって高まっており、墳丘検出面の標高49.75mにおいて、墳丘西側では第Ⅷ層：暗褐色粘質土の堆積が厚さ10cm程認められたが、東側は第Ⅶ層：黄灰色シルトが露出した。S D - 103の最も低い底面が標高49.22mである。この底面標高と造構検出面標高49.75mとの比高差0.5mが、現存墳丘高である。墳丘の長さに関しては、いずれの墳丘隅も検出していないが、周溝の延長によって北隅を想定し定点とするならば、短辺5.5m以上、長辺9m以上の規模と考えられる。なお、墳丘部分においてS D - 106を検出している。北壁土層断面の観察から、墳丘を削平する第Ⅵ層：黒灰色粘質土を切り込んでおり、方形周溝墓とは無関係な造構と判断した。

**S D - 103 S D - 103**は、北東 - 南西に軸をもつ墳丘北西辺の周溝である。その規模は、造構検出面で幅約3.5m、深さ約0.4mを測る。溝底面は凹凸が激しく、とくに調査区南側は深く落ち込んでおり、最深部で標高49.22mを測る。底面は第Ⅸ層：灰褐色粗砂に達する。

北壁断面の観察によれば、溝内の土層堆積は3層に分層することができる（図版7-3）。第1層：茶褐色粘質土と第2層：暗褐色粘質土は溝内に水平堆積するが、第3層：暗褐色粘質土と黄灰色シルトのブロック土は主に墳丘側となる東側に傾斜堆積している。第3層の堆積状況は、墳丘側からの流れ込みを示している。おそらく、墳丘盛土が崩落して堆積したものであろう。遺物は、弥生土器が6個体出土している。

**S D - 104** S D - 104は、北西 - 南東に軸をもつ墳丘北東辺の周溝である。その規模は、造構検出面で幅約2.2m、深さ約0.35mの溝である。溝底面は北側に向かって落ち込み、最深部で標高49.40mを測る。底面は第Ⅸ層：灰褐色粗砂に達する。

北壁断面の観察によれば、溝内の土層堆積は3層に分層することができる。堆積状況はS D - 103とほぼ同じで、第1層：茶褐色粘質土と第2層：暗褐色粘質土が溝内に水平堆積し、第3層：暗褐色粘質土と明黄灰色粘質土のブロック土は、墳丘側となる西側に傾斜堆積していた。地山となる明黄灰色粘質土を含んだ暗褐色粘質土の堆積は、墳丘側からの流れ込みを示すものであろう。遺物は極めて少なく、弥生土器小片と石礫が1点である。



第11図 ST-102選擇平面図及び北壁土層断面図 (S=1/80)

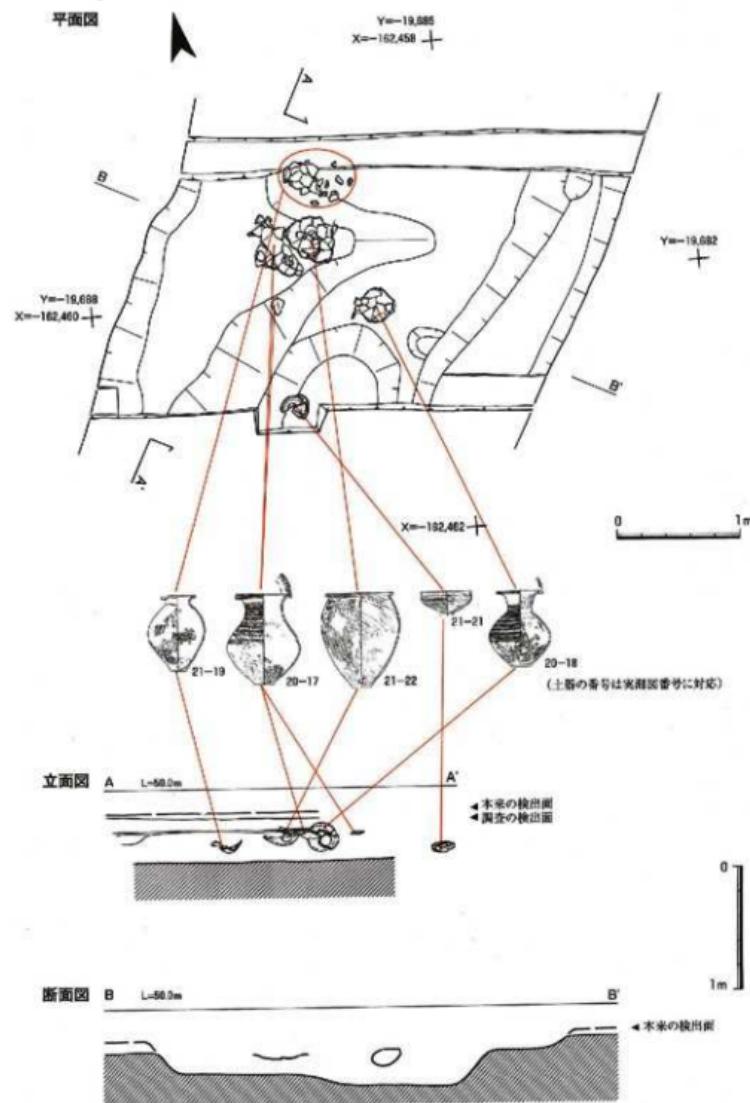
**遺物出土状況（第12図、図版7-1・2）** SD-103からは土器が6個体分、いずれも溝底面から浮いた状態で出土している。墳丘から約1.2m離れた溝のほぼ中央には、櫛描文広口壺（第20図-18）が横倒しで原形を止めたまま割れていた。本土器の埋没標高は、溝底面側に面した胴部中央で最も深い49.50mを測る。付近の溝床面は標高49.40mであるから、それより約10cmほど浮いていたことになる。これに対して溝上面側に面する胴部中央は、標高49.72mを測る。層位的には、第1層：茶褐色粘質土と第2層：暗褐色粘質土の層境に位置している。なお、この櫛描文広口壺は、胴部下半に穿孔があり、供獻土器の可能性がある。

この櫛描文広口壺と同じような埋没標高にあるのが無文広口壺（第21図-19）である。無文広口壺は、櫛描文広口壺よりもやや周溝外肩に近く、調査区北排水溝に接して横倒しの状態で検出した。本土器の埋没標高は、溝底面側に面した胴部中央で最も深い49.47mを測る。溝底面側の胴部上半は原位置をとどめていたが、胴部下半および溝上面側に面する胴部上半は周囲に散らばった状態であった。底部に至っては、最も遠くに離れ、逆方向を向いていた。この無文広口壺については、その出土状況から、横転して埋没した後にその上面が破碎されたものと考えられる。破碎行為が意図的なものであったかは、不明である。なお、北排水溝からは、この無文広口壺の破片とともに壺蓋（第21図-20）が出土している。壺蓋に関しては、排水溝掘削時の出土のため現位置を確認できなかったが、無文広口壺と近接する位置にあったと考えられる。ただし、壺蓋は小型無頸壺のものであって、その小さな口径では無文広口壺の口径にはあわない。さらに壺蓋は、胎土に角閃石を含んでおり生駒西麓産と考えられる。これに対し無文広口壺の胎土は、生駒西麓産ではない。両者は本来のセットではない。

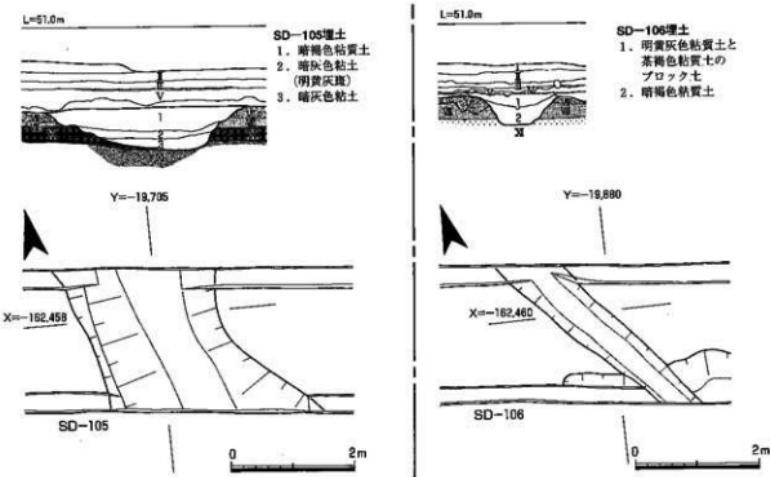
上記の二者よりも埋没標高が高いものとして、櫛描文広口壺（第20図-17）と甕（第21図-22）がある。周溝外肩に近い位置で、先の無文広口壺と並ぶように検出されたが、埋没標高は異なる。櫛描文広口壺と甕は、口縁部の向きを正反対に、横倒しの状態で接していた。両者ともに、標高49.66m付近でその上面が粉々に割れ、現位置をとどめていない状態であった。これに対し、埋没最深部となる溝底面側では両者ともに原形をとどめていた。最深の埋没標高は、櫛描文広口壺が49.60m、甕が49.54mである。甕に対して壺の埋没標高がやや高いことになるが、上面の破碎された標高は同じである。両者の上面が破碎された標高49.66m付近は、第1層と第2層の層境となる。おそらく、上面が破碎されたのは、ほぼ同時期であったと考えられる。

これらの群とはやや離れて、調査区南端の溝中央で高坏坏部（第21図-21）を検出した。脚部を欠き二つに割れた坏部は、重ねられ口縁部を上にして置かれた出土状態であった。埋没標高は、最高値を示す口縁部で49.53m、最深値を示す坏部下半で49.47mを測る。この高坏坏部の出土地点は、溝底面が著しく落ち込んでおり、その底面標高は49.22mを測る。高坏坏部は、溝底面より約20cm程浮いた状態であった。埋没標高の最深値49.47mは、先の櫛描文広口壺（第20図-18）や無文広口壺（第21図-19）の埋没最深値と同一である。同時期埋没の可能性も想定される。

SD-104からは、石錐（第21図-23）が1点出土した。他は土器小片のみで、目立った遺物はない。石錐は、調査区南端の溝中央から埋没標高49.54mで検出した。出土地点は、溝底面が北側に向かって落ち込みを始めた部分である。その底面標高は49.40mであり、石錐は底面より約15cmほど浮いた状態であった。



第12図 SD-103遺物出土状況 平面図・立面図・断面図 (S=1/40)



第13図 SD-105・106遺構平面図及び北壁土層断面図 (S=1/80)

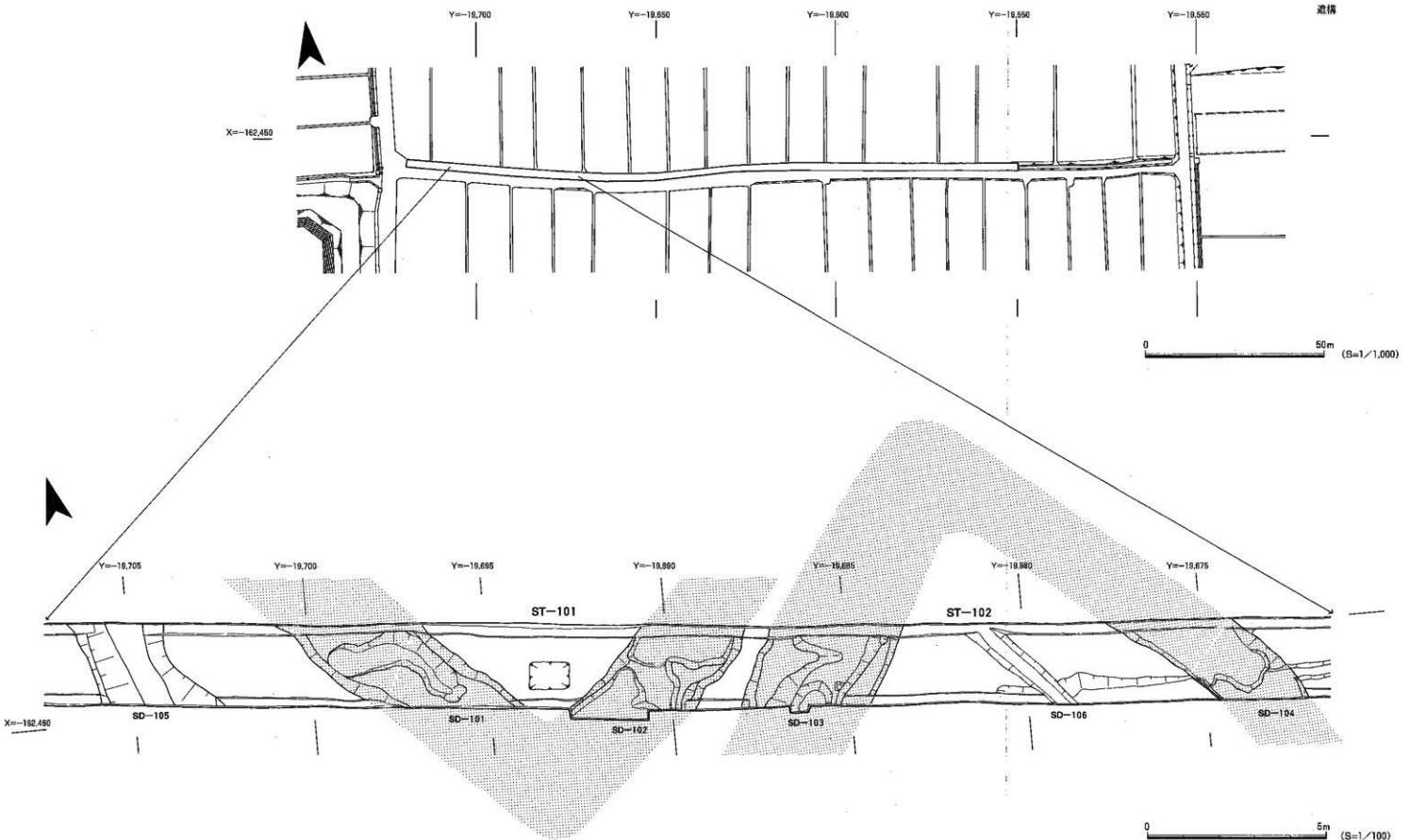
**SD-105 (第13図、図版8-1)**

SD-105は、ST-101の西側で検出した南-北に軸をもつ大溝である。検出面は、第VI層：暗褐色粘質土の上面である。地形が東から西へ傾斜するため、西肩の検出標高は49.60m、東肩の検出標高は49.70mと10cmの比高差がある。溝は幅約2.6m、深さ約0.7mを測る。溝底面の標高は、49.00mである。溝の東肩はやや外湾気味であるが、調査区の幅が狭いため、どの方向に溝が延長していくのかは不明である。溝断面は、逆台形を呈する。溝内の土層堆積は、その色調から3層に分層されるが、大きくは上層の暗褐色粘質土（第1層）と下層の暗灰色粘土（第2・3層）に2分できよう。遺物は時期不明の土器小片が数点出土しただけにとどまる。このため本溝の時期決定はできない。

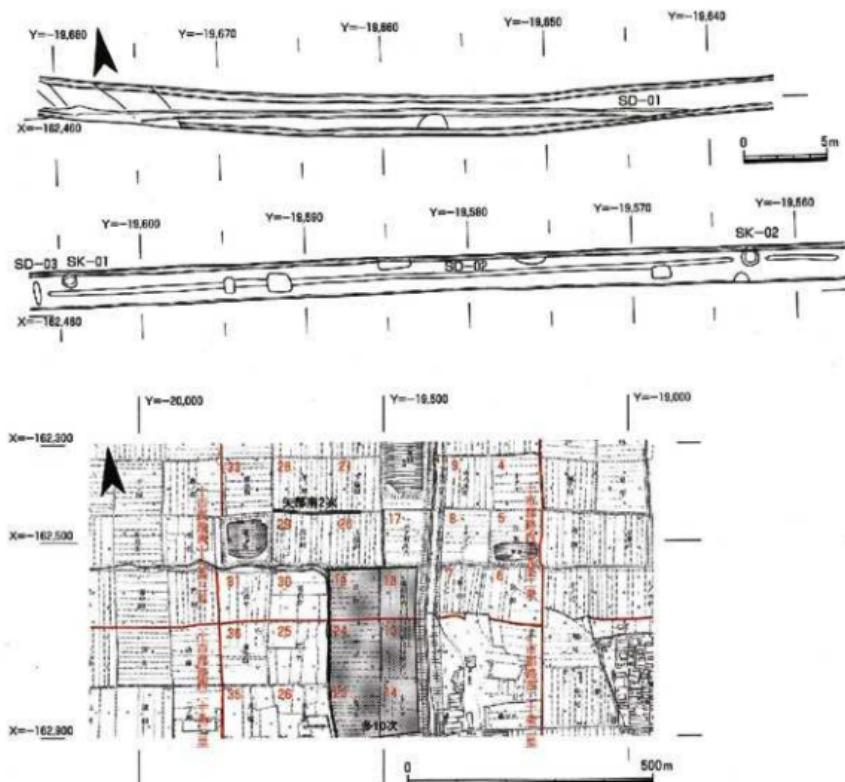
本溝の性格であるが、方形周溝墓群に近接し主軸方向もほぼ一致することから、方形周溝墓の周溝という可能性もある。しかし、方形周溝墓とすると、これに対となる溝はその西側では検出されていない。また、ST-101や102の周溝と比較すると、やや深く溝底が平坦であり、異なる印象を受けた。方形周溝墓とは全く無関係なのかもしれないが、一方において墓域を区画した溝の可能性も想定される。

**SD-106 (第13図、図版8-2)**

SD-106は、SD-103とSD-104に囲まれたST-102の墳丘内と考えられる位置で検出した北西-南東に軸をもつ小溝である。第VI層：黒灰色粘質土を切り込み、検出標高は49.90mである。規模は、幅約0.7m、深さ約0.5mを測る。溝底面の標高は49.35mである。溝内の土層堆積は、2層に分層される。第1層は明黄灰色粘質土と茶褐色粘質土のブロック土、第2層は暗褐色粘質土であった。遺物は全く出土していない。



第14図 第2次調査の弥生時代造橋配置図

第15図 第2次調査の中世遺構配置図 ( $S=1/300$ ) と周辺条里図 ( $S=1/10,000$ )

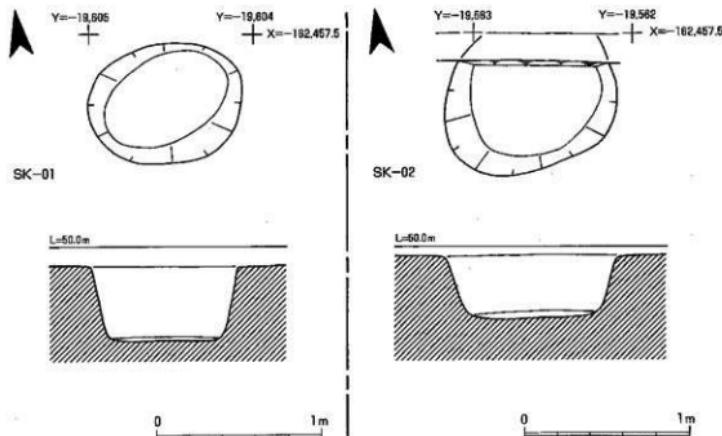
## (3) 古代・中世

古代・中世の遺構として素掘り小溝3条、土坑2基を検出した。

素掘り小溝 [SD-01, 02, 03] (第15図、図版3-3・図版8-3)

素掘り小溝は、弥生時代以降の遺物包含層である第VI層：黒灰色粘土の上面で検出し、その埋土は上面の第V層と同じ灰色粘土であった。第V層は須恵器や土師器、瓦器塊をわずかに含むが、近世陶磁器類は含まない。このことから、素掘り小溝が近世までは下らないと推定された。

素掘り小溝の性格を考える上で、南北小溝のSD-03が注目される。SD-03は、調査区幅約2mでの検出でしかないが、Y = -19.607m線付近の検出であり位置的には、現行の畦畔および条里制の南北坪界線にはほぼ一致する。それは、十市郡路西19条2里20坪と29坪、および十市郡路



第16図 SK-01・02遺構平面図及び立面図 (S=1/30)

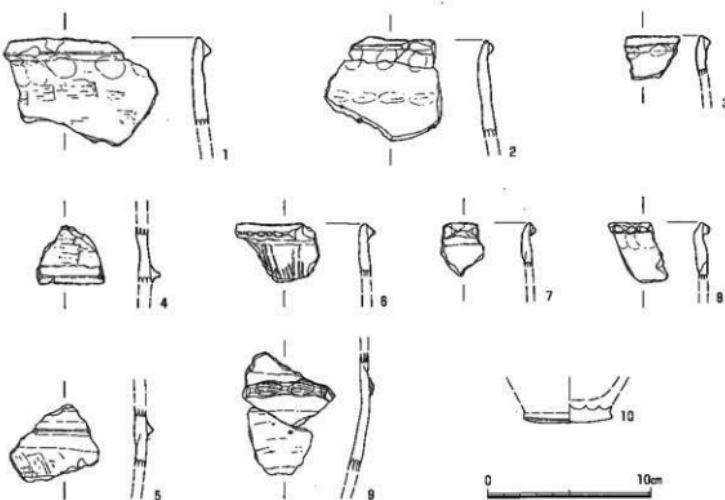
西19条2里21坪と28坪の坪界にあたる。また、本調査地より東南に約150m離れた多遺跡第10次調査では、 $Y = -19.500$ m線で南北坪界溝が検出されている。今回検出したSD-03は、その坪界溝から西に約107m離れた位置にある。この距離はほぼ一町（約109m）にあたり、その整合性からもSD-03は坪界溝と見なせるであろう。おそらく、SD-03は南北坪界の東溝で、これと対になる西側の南北溝も存在したのであろうが、現行水路の搅乱により検出はできなかった。

東西溝のSD-01と02については、東西の坪界溝の可能性が考えられる。今回の調査区は、路西19条2里28坪と29坪、および路西19条2里20坪と21坪の東西坪界線にあたる。南北坪界溝と考えられるSD-03と同様に、第V層：暗褐色粘土まで深く刻まれたSD-01と02が東西坪界溝である可能性は高いといえよう。両者が東西坪界溝であるならば、SD-01を南溝、SD-02を北溝とし、その間隔約1.5mが大畦畔であろう。ただし、調査区幅は約2mであり慎重を要する。

素掘り小溝を覆う第V層：灰色粘土は、多遺跡第10次調査で検出された第V層：暗灰色粘土層と同一のものと考えられる。多遺跡では、その上面において珪片やヒト・ウシの足跡を検出している。調査を担当した寺沢蔦氏は、水田耕上と推定し上限を10世紀後半～11世紀初頭に下限を13世紀前半とする年代を与えた。本調査地の灰色粘土から出土する遺物も、やや時期の下る瓦器塊が認められるものの、その年代にはほぼ一致する。

#### SK-01・02（第16図）

SK-01・02ともに遺物は含まなかつたが、灰色粘土で埋没しており素掘り小溝と同様の年代が与えられる。遺構検出面は標高49.90mを前後とする。SK-01は平面が楕円形で、長軸約1m、短軸0.7m、深さ約0.6mを測る。SK-02は平面が楕円形で、長軸約1.1m、短軸1m、深さ約0.5mを測る。两者ともにほぼ同じ形・規模で、中世水田に伴う遺構と考えられる。



第17図 第2次調査出土の凸帯文土器実測図 (S=1/3)

## 5. 遺物

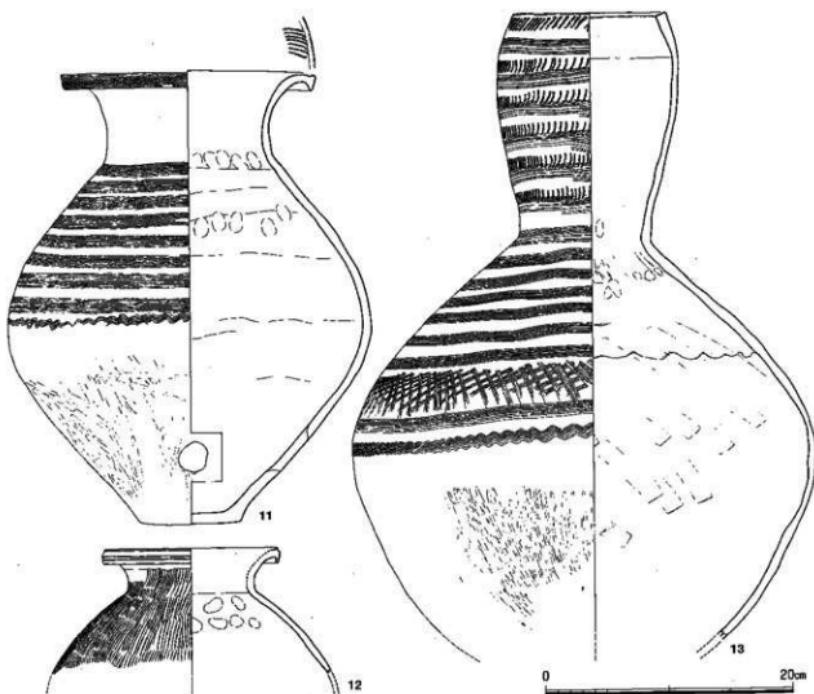
### (1) 縄文時代

**凸帯文土器 (第17図・図版9-1)** 矢部南遺跡第2次調査では、縄文時代晩期後半の特徴である凸帯文土器が出土した。いずれも弥生時代の方形周溝墓の周溝出土である。2・9はSD-101出土。1・4～7・10はSD-102出土。3・8がSD-103出土。凸帯上の刻目の有無で分類した。

**無文凸帯 (1～5)** 1・2・3は口縁部、4・5が胴部である。1と4は同一個体と考えられる。1は口縁部に接して偏平な三角の凸帯が貼り付けられる。外面に左方向のケズリ痕がある。内面はナデであるが、部分的に条痕を残す。4は屈曲のない胴部に、断面三角の凸帯が貼り付けられる。外面に左方向のケズリ痕がある。2は口縁部に接して三角の凸帯が貼り付けられる。凸帯は1・3に比べて小ぶりである。内外面の風化が著しい。3は口縁部に接して偏平な断面三角の凸帯が貼り付けられる。摩滅が激しく、調整は不明である。胎土に角閃石を含む。5は屈曲のない胴部に、断面三角の凸帯が貼り付けられる。下から上への縱方向のケズリ。

**刻目凸帯 (6～9)** 6・7・8は口縁部、9が胴部である。6は口縁部に接した断面三角凸帯の上面を軽く刻んでいる。刻目の形状は、横長のD字である。外面に縱の条痕を残す。内面はナデ。7は小片であるうえに摩滅が激しいため、情報量は少ない。こぶりの断面三角凸帯を、刻むというよりは押圧している。8は口縁部に接して断面三角凸帯を貼り付けるが、その後に凸帯と口縁部をつまんでヨコナデを施す。凸帯の上面を、横長のD字状に軽く刻む。9は胴部の凸帯を、長楕円形に押圧する。押圧部には貝殻条痕が観察でき、東海地方からの搬入品と考えられる。

**底部 (10)** 底面は凸状を呈し、底部側面が張り出している。



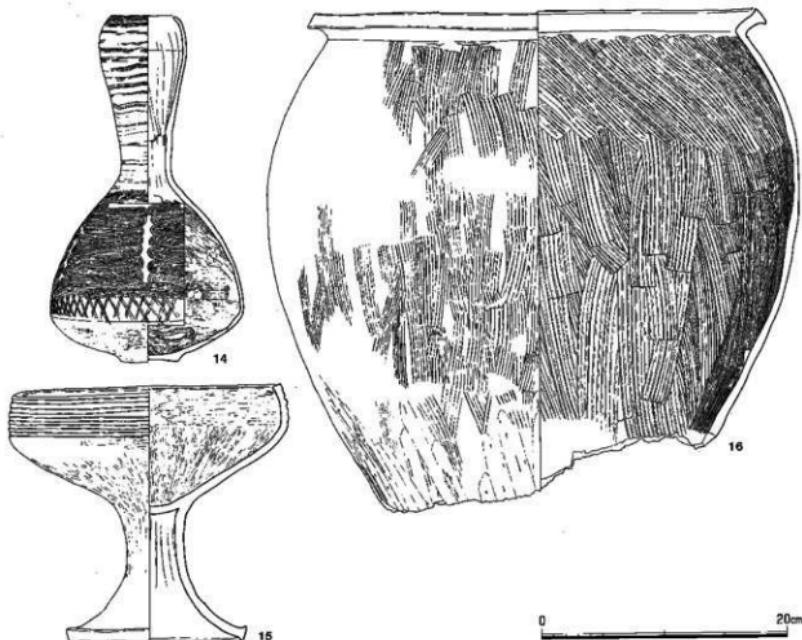
第18図 SD-102の出土土器実測図1 (S=1/4)

## (2) 弥生時代

### SD-102出土土器 (第18-19図、図版9-2・10-11-12)

**広口壺** (第18図-11・図版10-1、第18図-12・図版12-3) 11は器高37.2cmで、ほぼ完形。口縁端部は上下に肥厚する。頸胸部の境は明瞭で、胴部中位に最大径をもつ。口縁部端面に波状文を、内面には櫛描列点文を施す。胴部上半には8帯の直線文とその下端に櫛描波状文を巡らせる。外面下半は、継位ケズリ後に継位ミガキを施す。内面に指頭圧痕。色調は乳白色。胴部下半に穿孔。12は胴部下半を欠く。口縁部端面に凹線文3条を巡らせるが、胴部は継位ハケ調整のみ。

**細頸壺** (第18図-13・図版11-2、第19図-14・図版11-1) 13は大型で、底部を欠く。内湾する口縁部とやや膨らみのある細長い頸部に、球体形の胴部をもつ。頸部には櫛描列点文と櫛描直線文を交互に6帯ずつ施す。この文様パターンは大和ではない。胴部上半には、櫛描直線文7帯、斜格文、櫛描直線文1帯、櫛描波状文1帯を施す。外面胴部下半は、継位ケズリの後に継位ミガキを施す。内面胴部は、左上がりハケ後ナデ。胴部下半、穿孔の有無不明。色調は乳白色。

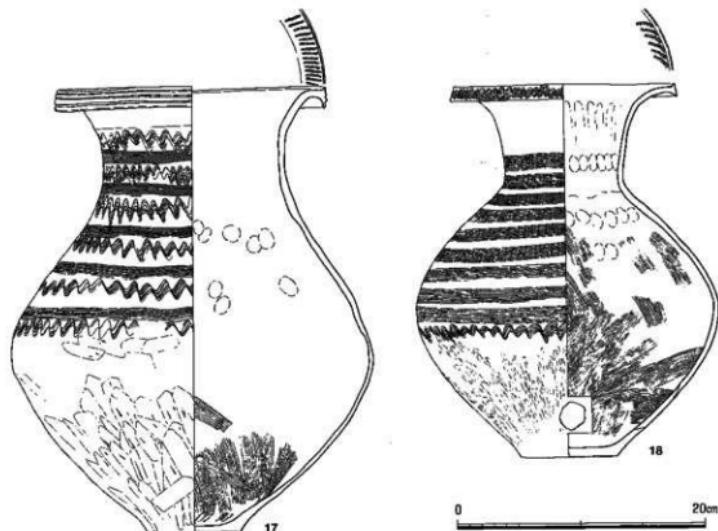


第19図 SD-102の出土土器実測図2 (S=1/4)

14は器高28.4cmで、完形品。内湾する口縁部とやや膨らみのある細長い頸部に、下膨れの胴部をもつ。頸部には2帯複合櫛描文（上下櫛原体4条／3.5mm、間隔4mm）を10帶施す。胴部には5方向の縦型流文と、その下端に斜格文を施す。頸部と胴部の文様界には、2帯の櫛描列点文。外面胴部下半は横位ミガキ。内面は胴部下半に縦位ハケ、胴部上半が横位ハケ。色調は茶褐色で胎土に角閃石を含む。これらの特徴より、生駒山西麓産と考えられる。胴部下半に穿孔。

高坏（第19図-15・図版12-1） 器高21.0cmで、完形品。坏部上半はやや内湾気味に屈曲、脚部はゆるやかに広がる。坏部上半に5条の四線文。坏部下半は縦位ケズリ後、縦位ミガキ。脚部は縦位ミガキ。坏部内面は、下半が縦位ミガキ、上半が横位ミガキ。脚部内面はナデ。色調は赤褐色。

甕（第19図-16・図版12-3） 口径36.0cmの大型品で、胴部下半を打ち欠く。胴部上半に最大径をもち、すばまつた頸部から口縁部が短く屈曲する。口縁部の上端と下端は、ヨコナデによって肥厚する。胴部上半から中位は縦位ハケ。胴部下半は下から上への縦位ケズリ。内面は、胴部下半から中位にかけて縦位ハケ。胴部上半は左上がりハケ。色調は赤褐色。



第20図 SD-103の出土土器実測図1 (S=1/4)

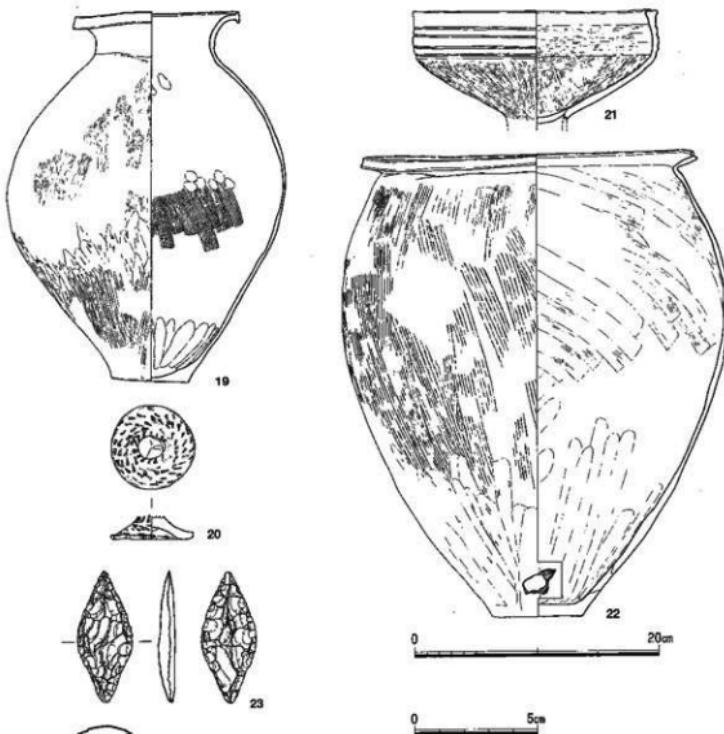
## SD-103出土土器（第20・21図、図版9-2・10・11・12）

広口壺（第20図-17・図版10-2、第20図-18・図版10-3、第21図-19・図版10-4） 17は器高36.6cm。接合によりほぼ完形に復元できる。口縁部は開き、その端部は上下に肥厚する。頸部にしまりはない。胴部最大径は中位より下がった位置にあり、軽い屈曲がある。口縁部端面に凹線文3条、内面には櫛描列点文を施す。胴部上半には、櫛描波状文6帯、櫛描直線文5帯を交互に施す。文様施文前の胴部上半には左上がりのハケが施され、ナデ消されている。胴部下半は継位ケズリ、胴部最大径付近では左上がりから横位のケズリとなる。内面は胴部下半に継位ハケ、胴部上半は左上がりハケ後ナデ。胴部下半、穿孔の有無は不明。色調は赤褐色。

18は器高30.6cm。検出時には土圧で割れていたが、本来は完形。口縁部は外湾し、その端部は上下に肥厚する。頸部は筒状で、球体形の胴部をもつ。口縁部端面に櫛描波状文、内面には櫛描列点文を施す。頸部から胴部上半にかけて櫛描縦状文6帯、櫛描直線文3帯、櫛描波状文1帯を順に施す。胴部下半は継位ミガキ。その後、底部側面にヨコナデ。内面胴部下半は右上がりハケ、胴部上半は左上がりハケ後ナデ。胴部下半に穿孔。色調は淡褐色。

19は器高30.4cm。接合によりほぼ完形に復元できる。短く直立した頸部から、口縁部が短く屈曲する。口縁部の上端と下端は肥厚する。胴部は中位に最大径をもつ。胴部上半は、継位ハケ後ナデ。胴部下半は、下から上への継位ケズリ後継位ミガキ。内面は左上がりハケ後ナデ、底面のナデは強い。なお、口縁部に紐孔はない。胴部下半、穿孔の有無は不明。色調は赤褐色。

壺蓋（第21図20、図版12-4） 捩径6.5cmで、つまみ上部を欠く。つまみ側縁には、継の扇形文。



第21図 SD-103の出土土器実測図2 (S=1/4) · SD-104の出土石器実測図 (S=1/2)

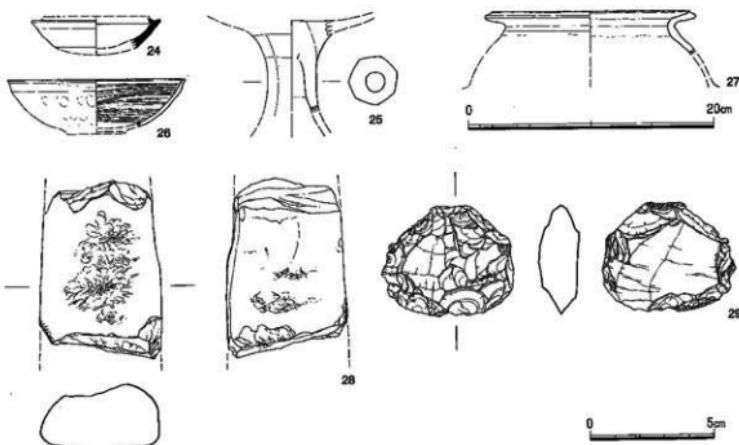
身には左回りに3段の横の扇形文。据にそって右回りの横の扇形文。据端面には刻み目。内面はナデ。2孔-1対の紐孔。色調は淡褐色で、胎土に角閃石を含む。生駒山西麓産と考えられる。

高坏（第21図21、図版12-2） 口径19.8cmで、脚部を欠く。口縁部からやや下がった位置から屈曲部まで、4条の凹線文を廻らせる。坏部下半は継位ケズリ後、継位ミガキ。内面は坏部下半が継位ミガキ。坏部上半は横位ミガキ。色調は乳白色。

甕（第21図22、図版11-4） 器高38.1cmで、完形品。胴部上半に最大径をもち、口縁部は短く屈曲する。口縁端部は、上方に肥厚する。胴部上半は継位ハケ。胴部下半は下から上への継位ケズリ。内面は胴部上半が左上がりハケ。胴部下半がナデ。胴部下半に穿孔。色調は淡褐色。

#### S D-104出土石器

石鎌（第21図23、図版12-5） 凸基Ⅱ式。サヌカイト製。現長5.33cm、最大幅2.23cm、最大厚0.58cm、重量5.67gを測る。先端折損。両側縁は、鋸歯状に丁寧な細部調整。基端部に自然面を残す。稜線は摩耗している。



第22図 第2次調査の出土土器実測図(1/4)・出土石器実測図(1/2)

## (3) その他の時代の土器 (第22図)

須恵器坏身 (24) 立ち上がり端部を欠き、受け部でかろうじて径を復元した小片。立ち上がりはきわめて短く、内傾する。色調は青灰色を呈する。7世紀前半。第V層：灰色粘土出土。

土師器坏身 (25) 坏部および脚裾部を欠く。外面は、ヘラ削りによって面取りを行っている。このため、断面7角形を呈する。内面は中空であるが、下半付近はケズリによって生じたと考えられる稜線をもつ。8世紀。第V層：灰色粘土出土。

瓦器塊 (26) 小片で、図示した径および傾きは確実ではない。口縁端部は、外反し段状の沈線が施される。内面のミガキは、口縁部から見込み付近まで施されるが、ややまばらである。外面のミガキは、口縁部付近にまばらに施している。外面下半部には、多数の指頭圧痕を残している。風化が著しい。12世紀後葉から13世紀中葉。第V層：灰色粘土出土。

土師器羽釜 (27) 口径16.0cm。口縁部は外反し、端部はハネ上げとなる。胴部の大半を欠くが、胴部中位よりも下に鈎をもち、下膨れの形態と考えられる。色調は乳白色を呈する。16世紀前半。水路の擾乱土より出土。なお、第V層：灰色粘土は、この時期の遺物を含まない。

## (4) 石器 (第22図28・29、図版12-7・8)

凹石 (第22図28、図版12-8) 現長7.4cm、最大幅4.93cm、最大厚2.8cm、重量157.19gを測る。左面の敲打痕より凹石としたが、全面が研磨されており転用品と考えられる。上下両端は折損するが、下端に折損後の打痕が認められる。SD-103第1層出土。

クサビ形石器 (第22図29、図版12-7) サヌカイト製。現長4.43cm、最大幅5.34cm、最大厚1.48cm、重量42.43gを測る。左面の上下左右両端につぶれ痕が認められる。特に、上端につぶれ痕が顕著である。暗褐色粘質土出土。

### 第3節 まとめ

今回の矢部南第2次調査では、弥生時代中期中葉の方形周溝墓を2基、古代以前の溝2条、古代・中世の素掘り小溝3条、土坑2基を検出した。また、遺構には伴わないが、縄文時代晚期終末の凸帯文土器も出土している。調査成果の要点を時期毎にまとめる。

**縄文時代** 縄文時代晚期終末の凸帯文土器が、調査区の西側約3分の1に集中して出土した。遺構に伴うものではなく、数量もさほど多くはない。しかし、形態的特徴は、胴部に屈曲をもたない2条凸帯深鉢、口縁部に接して貼付される小ぶりな凸帯、凸帯上に軽く施された浅い刻目、一定量の無刻目凸帯など、奈良県内出土の凸帯文土器の中でも新しい様相をもつ。比較対象となる資料としては、桜井市粟殿遺跡第4次調査の凸帯文土器が挙げられる。<sup>(9)</sup> 奈良県内における縄文時代から弥生時代への転換を考えて行くうえで凸帯文土器の編年整備は欠かせず、今回の矢部南遺跡第2次資料はその一助となろう。また、矢部南遺跡における凸帯文土器の出土を、それを用いた集団の生活痕跡を見るならば、弥生時代前期に出現する多遺跡の弥生集団とのかかわりが問題となろう。

**弥生時代** 矢部南遺跡第2次調査における弥生時代の遺構検出面は第VII層：暗褐色粘質土の上面、標高49.80mである。2基の方形周溝墓（S T - 101・102）を検出した。S T - 101の東南辺周溝であるS D - 102からは6個体の土器〔広口壺・大甕・大型細頸壺・無文広口壺・細頸壺（河内産）・高坏〕、S T - 102の北西辺周溝であるS D - 103からは6個体の土器〔柳描文広口壺2点・無文広口壺・壺蓋（河内産）甕・高坏（脚部欠損）〕が出土した。これに対し、S T - 101の南西辺周溝であるS D - 101や、S T - 102の東南辺周溝であるS D - 104からはほとんど遺物が出土しない。土器が出土したS D - 102とS D - 103は、幅1m弱の土堤状に掘り残した部分を挟んで並行している。あたかも、土堤状の掘り残し部分に面して、S T - 101・102の土器が配置されていたかのようである。墓道の可能性も考えられよう。ただし、調査区幅が狭く2基の方形周溝墓とともに2辺を検出したのみであって、全体を明らかにしたわけではない。慎重に判断する必要がある。

方形周溝墓に伴う土器の出土状況であるが、S D - 102から出土した広口壺（第18図-11）と大甕（第19図-16）は、あたかもS T - 101の墳裾に立てて据えられたかのような検出状況であった。S D - 102の堆積土中には、掘り込みの痕跡を認めることができなかった。土器が横転せず埋没した状況から、ある程度泥土が溝底に溜まった段階で押さえ付けるようにして立てたことが想定される。広口壺は胴部下半に穿孔、大甕は底部を打ち欠いていた。これが供獻土器なのか、土器棺墓なのかは判断しかねる。土器内の粘土は洗浄したが、骨片などは出土していない。ただし、土壤的に骨片が残る可能性は少ない。

この他、周溝がある程度埋没した段階に、溝中央で横転する土器群がある。S D - 102の細頸壺（第19図-14）と高坏（第19図-15）、S D - 103の広口壺（第20図-17）と甕（第21図-22）である。周溝の土器群は、埋没状況が共通している。これらは、近接して横転し、それぞれの口縁部を逆向きにしている。壺や甕の胴部下半は穿孔されている。これらを横位に埋設された土器棺とするには、高坏が含まれることから否定される。供獻土器と考えたい。当初は供獻土器が倒

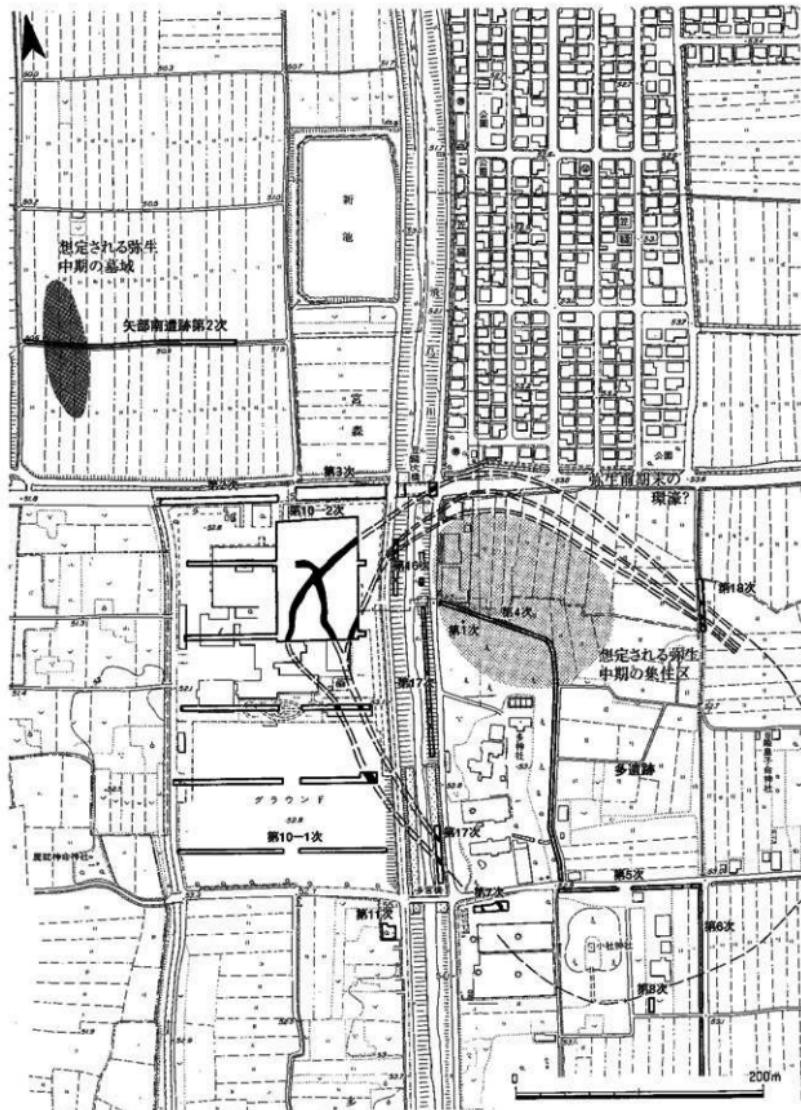
れたことによって生じた偶然と考えていたが、天理市前裁遺跡においても同様の山土状況が報告されており注目される。<sup>(1)</sup>このような出土状況の類例が増加するならば、注意する必要がある。

これらの土器群は、凹線文出現期の特徴を有している。大和編年でいうならば、SD-102土器群には第Ⅲ-3様式、SD-103土器群には第Ⅲ-4様式の年代が与えられる。搬入土器については、SD-102の細頸壺（第19図-14）とSD-103の壺蓋（第21図-20）が明らかに生駒西麓產土器である。その他にも、SD-102の大型細頸壺（第18図-13）、SD-103の広口壺（第20図-17）が、文様や器形に大和の土器とは微妙な違いがあり、搬入品の可能性が考えられる。

方形周溝墓以外に暗褐色粘質土で埋没する遺構として、2条の溝（SD-105・106）を検出したが、ほとんど遺物は含んでいなかった。このうち、SD-106はST-103の埴丘を削平する第VI層：黒灰色粘質土を切り込んでいて、弥生時代よりも新しくなる可能性がある。これに対し、SD-105は、方形周溝墓と同じ第VII層：暗褐色粘質土を遺構検出面としており、溝方向も周溝SD-101とほぼ一致する。方形周溝墓の周溝という可能性もあるが、これに対応する溝はその西側には検出されていない。また、方形周溝墓の周溝と比較してSD-105はやや深く、底面に凹凸がないことから、性格の違いが考えられる。幅狭い調査区での知見ではあるが、SD-105より西側に遺構が分布しないことから、墓域を西限した溝ということも想定される。

本調査区は、これら以外に弥生時代の遺構ではなく、遺物も希薄なことから、当時の墓域であったと考えられる。矢部南遺跡第2次調査区周辺が弥生時代の墓域であるならば、それを形成した集団の居住域が問題となる。現在のところ居住域が予想されるのは、東南に隣接した多遺跡である。矢部南遺跡第2次調査地は、多遺跡の北限と考えられる県道部分から約200m程の距離である（第23図）。ただし、現在の多遺跡の範囲決定<sup>(2)</sup>については、弥生時代前期後半の遺構の分布に基づくところが大きい。矢部南遺跡の方形周溝墓は弥生時代中期中葉であり、その段階の多遺跡については遺構分布の詳細が判明していない。むしろ、これまでの多遺跡の調査では、弥生時代中期中葉の遺構の分布は散漫な傾向にある。例えば、矢部南遺跡第2次調査区に最も近い多遺跡第10次調査区では、弥生時代中期後葉の遺構として井戸<sup>(3)</sup>が1基検出されているが、それ以外には流路状の小溝と銅剣切先埋納ピットなどわずかである。集落としては、縁辺部の様相を呈している。おそらく、弥生時代中期における多遺跡の集落としてのまとまりは、推定された遺跡範囲より狭く、現在の多神社の北側にあると考えられる。とすれば、矢部南遺跡第2次調査区との距離は約400mになる。やや離れているようにも思われるが、奈良盆地における弥生拠点集落と墓域の距離としては例外的なものではない。例えば、中曾司遺跡（集落）と土橋遺跡（墓域）は約300m、平等坊遺跡（集落）と前裁遺跡（墓域）は約500m、唐古・鍵遺跡（集落）と清水風遺跡（墓域）は約700mである。多遺跡と矢部南遺跡の関係を、集落とその墓域として捉えることができるならば、多遺跡第10次調査区の西側で検出した弥生時代前期以前から古代におよぶ複数の自然流路から、谷を挟んで向かい合う立地景観が復元される。

ただし、矢部南遺跡および多遺跡周辺には、水田が広がっており発掘調査はほとんど行われていない。多遺跡の範囲外に、弥生時代中期の居住域が展開する可能性もまだ残されている。矢部南遺跡第2次調査区の東側にある旧池は、農業用溜池であり周辺よりも高い地形に位置しているものと考えられる。旧池は遺物散布地とされており、ここに弥生時代中期の居住域があつた可能性も否定できない。今後、周辺で行われる農業関連工事等には、注意を払う必要がある。



第23図 矢部南遺跡と多遺跡の位置関係図 (1/4,000)

古代・中世 第V層：灰色粘土は、土師器や須恵器、瓦器壇などの摩耗小片は含むが、近世陶磁器類を含んでいない。おそらく、この第V層：灰色粘土と多遺跡第10次調査の第VII層：暗灰色粘質土は同一層であり、中世水田の耕作土層と考えられる。多遺跡第10次調査では、黄灰褐色砂に覆われた第VII層上面で、畦畔やウシ・ヒトの足跡を検出している。今回の調査区は水路であったため、第V層：灰色粘土の半ばまで搅乱を受けており水田痕跡の検出には至らなかった。しかし、壁面においては第V層：灰色粘土の上面に砂層の堆積を確認しており、周辺の耕作地であれば中世水田痕跡の検出が可能であることを示していた。第V層の上面標高は、西側の49.90mから東側の50.30mへと徐々に高くなる。また、この第V層：灰色粘土の下で、第VII層：暗褐色粘質土を遺構検出面として3条の素掘り小溝を検出した。南北の小溝SD-03は、十市郡路西19条2里20坪と29坪、および十市郡路西19条2里21坪と28坪の坪界溝であろう。東西の小溝SD-01・02も、十市郡路西19条2里28坪と29坪、および十市郡路西19条2里20坪と21坪の坪界溝である可能性が高い。このように、矢部南遺跡周辺には、古代末～中世の条里水田が良好な状態で遺存していると考えられる。

以上、矢部南遺跡第2次調査を時代毎に概観した。水路改修工事に伴う調査のため情報不足は否めないが、弥生時代中期中葉の2基の方形周溝墓を検出したことは重要な成果となった。現状況から、拠点集落の多遺跡に対して、その墓域として矢部南遺跡を位置づけておきたい。

註1) 清水真一 1999 「桜井市栗殿遺跡4次調査出土の绳文晚期土器について」(『みづほ』第28号)

註2) 松本洋明 1998 「4.前裁遺跡－前坂町」(『天理市埋蔵文化財調査概報 平成6・7年度(1994・1995年)』)

天理市教育委員会

註3) 小栗明彦 1999 「多遺跡 第19次調査」(『大和を掘る17 1998年度発掘調査速報展』)

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

註4) 今回の第23図に示した多遺跡の環濠範囲は、註3)における小栗明彦氏の推定復元図とした。さらに原型となる図として、註5)における寺沢薰氏の推定復元図がある。寺沢氏は、第10次調査で検出した大溝と、第7次調査のSD-102を一連の環濠としてとらえる。これに対し、第7次調査を担当した藤田三郎氏は、SD-102が溝幅1m強、深さ0.5m弱の小溝であることから環濠ではないと見ていている。これは第4次調査において、多神社社殿の東側からその南は、弥生時代遺構が散漫であると指摘されていることに一致する。遺跡南側の環濠について推定線を引くには、現在の発掘データではやや時期早尚の感がある。

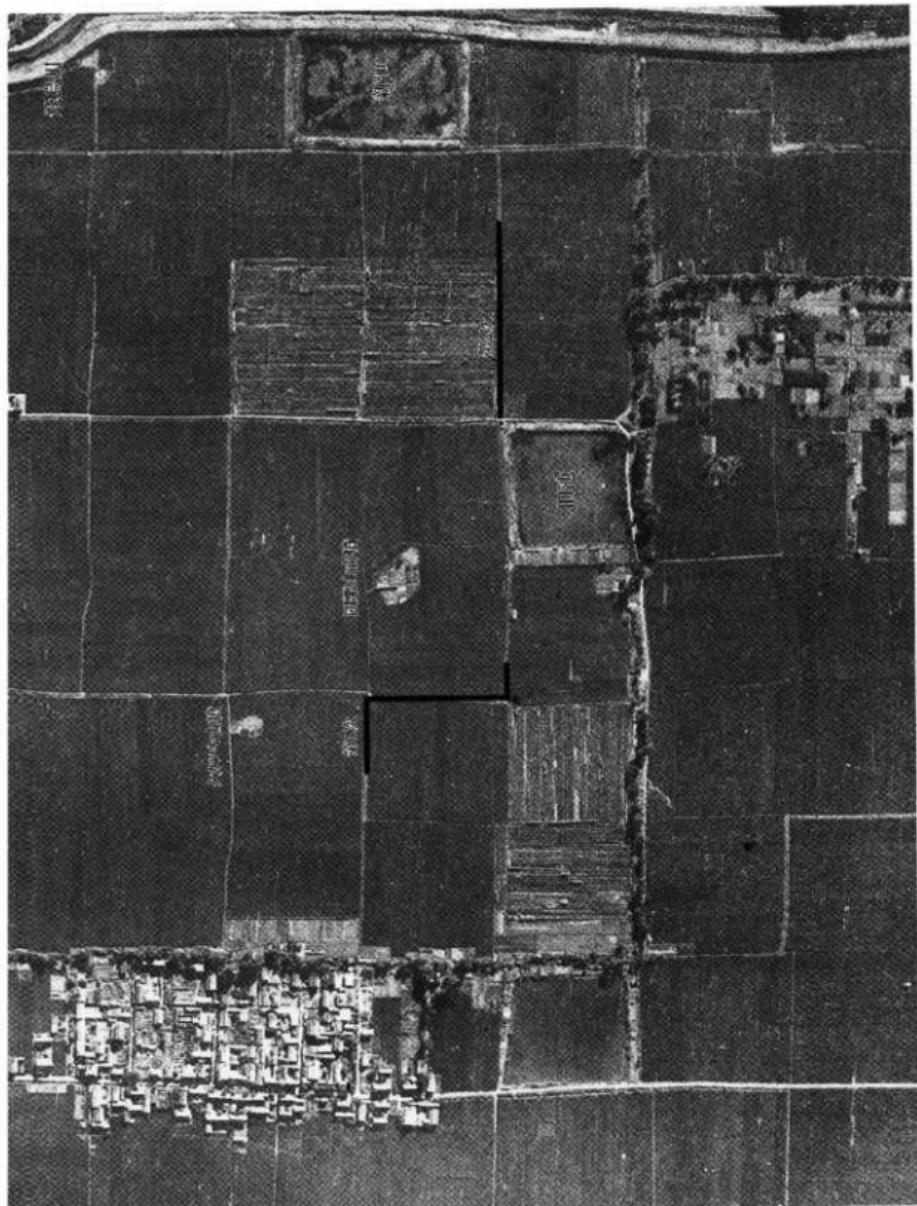
註5) 寺沢 薫 1989 「田原本町多遺跡第10次発掘調査概報－奈良県立心身障害者総合療育リハビリテーションセンター建設に伴う発掘調査の概要－」(『奈良県遺跡調査概報(第二分冊)』1986年度)

奈良県立橿原考古学研究所

註6) 註4) に同じ

# 図版

(この写真は、岡山地理院長の承認を得て、米倉東空軍が撮影したものを複写撮影した。)



昭和23年 航空写真（上が北）



1. 調査前風景  
(第Ⅰ調査区東から)



2. 第Ⅱ調査区西壁上層堆積状況  
(S-24東から)



3. 第Ⅱ調査区調査風景  
(北東から)



1. 調査前風景（東から）



2. 弥生遺構検出状況（南西から）



3. 中世遺構検出状況（南西から）



ST-101 (方形周溝墓) 完掘状況 (南西から)



1. SD-102遺物出土状況 1  
(北西から)



2. SD-102遺物出土状況 2  
(北西から)



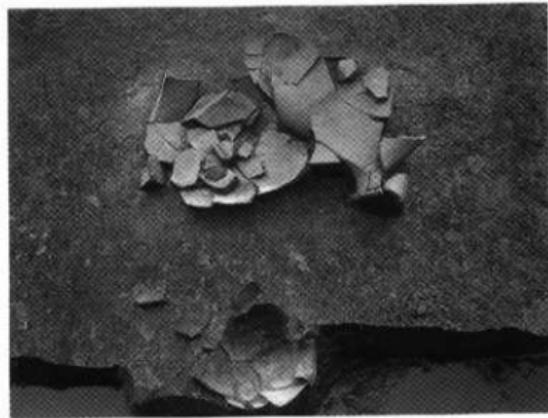
3. SD-101北壁土層堆積状況  
(南から)



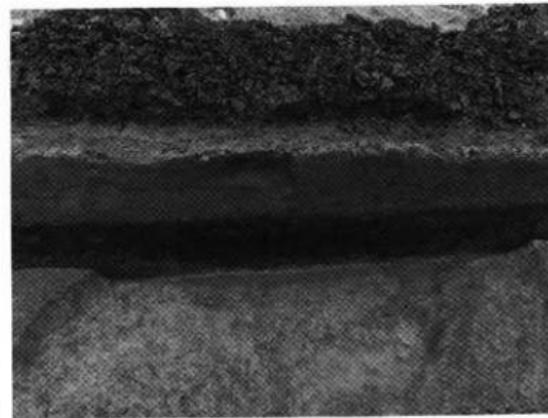
ST-102 (方形周溝墓) 完掘状況 (東南から)



1. SD-103遺物出土状況1  
(北東から)



2. SD-103遺物出土状況2  
(北から)



3. SD-103北壁土層堆積状況  
(南から)



1. SD-105完掘状況（南から）

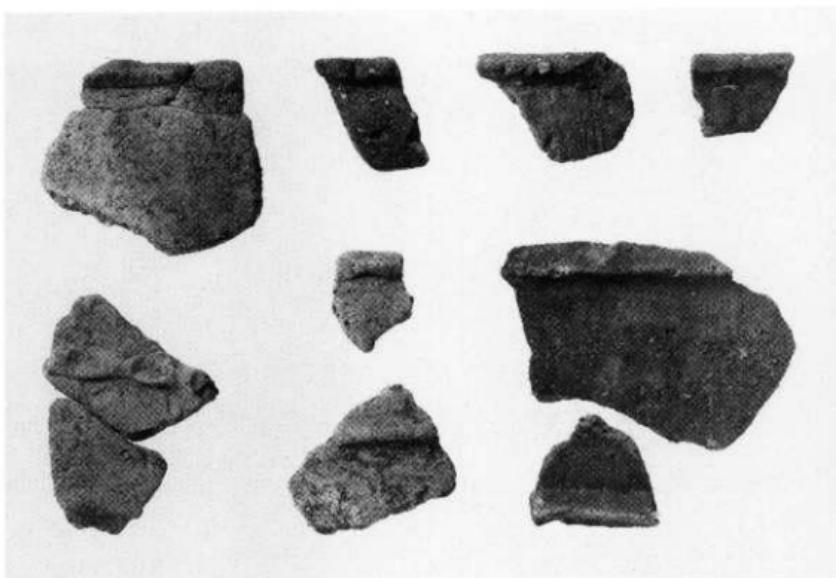


2. SD-106完掘状況（東南から）



3. 中世素振り小溝完掘状況  
(南西から)

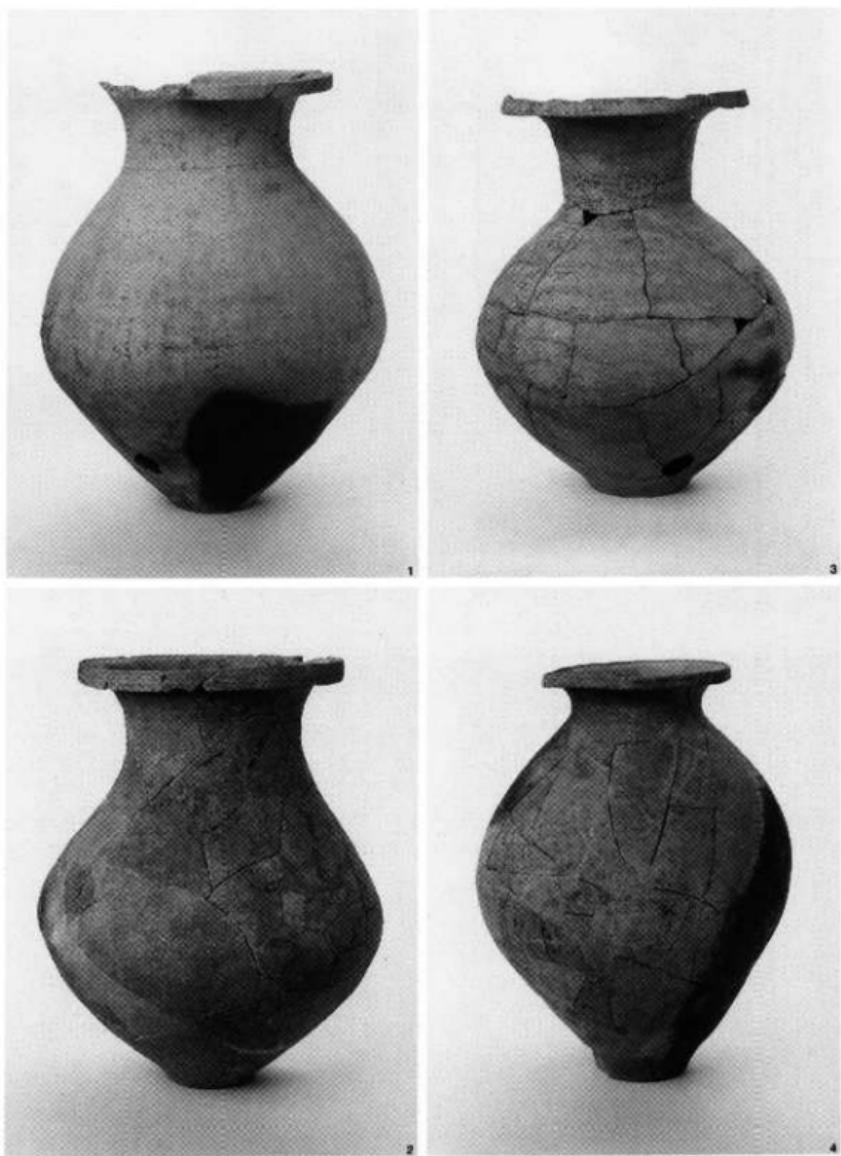
圖版 9  
第2次調查  
遺物1（縄文土器・弥生土器集合）



1. 縄文時代晚期後半 凸帶文土器



2. 方形周溝墓出土 弥生土器集合



弥生土器 1 1(第18圖11)—SD—102(ST—101)  
2(第20圖17)・3(第20圖18)・4(第21圖19)—SD—103(ST—102)



弥生土器 2

1 (第19図14)・2 (第18図13)・3 (第19図16) — SD-102 (ST-101)

4 (第21図22) — SD-103 (ST-102)



1



3



2



4

1. 第2次調査 弥生土器 3 1(第19図-15)・3(第18図-12)-SD-102(ST-101)  
2(第21図-21)・4(第21図-20)-SD-103(ST-102)



5



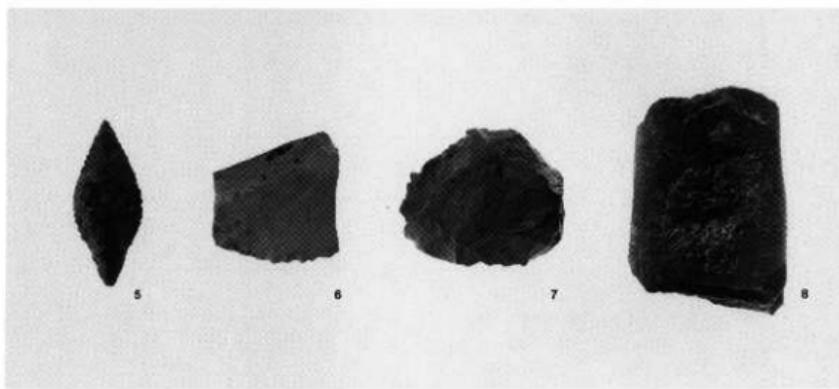
6



7



8



2. 第1・2次調査 石器 5(第21図-23)-第2次SD-104(ST-102)、6(第5図-1)-第1次、  
7(第22図-29)・8(第22図-28)-第2次

## 報告書抄録

ふりがな	やべ みなみ いせき						
書名	矢部南遺跡発掘調査報告－第1・2次調査－						
圖書名							
巻次							
シリーズ名	田原本町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第2集						
編著者名	豆谷和之						
編集機関	田原本町教育委員会						
所在地	〒636-0392 奈良県磯城郡田原本町 890-1						
発行年月日	西暦 2000年3月31日						
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在	コ一ド 市町村	北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
矢部南 第1次	奈良県磯城郡田原本 町大学矢部 382-1 西隣接地他	293636	34°32'06"	135°46'58"	1996.11.18～ 1996.11.25	約 525	土地改良事業に 伴う試掘調査
矢部南 第2次	奈良県磯城郡田原本 町大学矢部 349-1 南隣接地他	293636	34°32'06"	135°47'10"	1997.12.10～ 1997.12.24	約 425	土地改良事業に 伴う発掘調査
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
矢部南1次	散布地		――	サスカイト製スクレイパー			
矢部南2次	墓	弥生	方形周溝墓2基	凸帯文土器・弥生土器・ 石器	多遺跡の弥生時代中期中葉 の墓域と考えられる		

田原本町文化財調査報告書 第2集

矢部南遺跡発掘調査報告

-第1・2次調査-

平成12年3月31日

発行 田原本町教育委員会

印刷 明新印刷株式会社